（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第56輯

大　場　遺　跡

南海本線分岐線代替地造成事業に伴う発掘調査報告書

1990．3

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第56輯

大場（おおば）遺跡

南海本線分岐線代替地造成事業に伴う発掘調査報告書

1990．3

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

序　　文

泉佐野市西本町にあります大場遺跡は、関西国際空港へのアクセスの一つとして進められている関西国際空港連絡鉄道南海分岐線および南海本線連続立体交差事業、泉佐野市都市計画道路事業の事業地内の代替地造成工事計画にともなって発掘調査が行われたものです。

調査地は海岸線から約200mほどのところにあり、これまで遺跡のあることは知られていませんでしたが、東方に隣接して現在の泉佐野市街地の原形になったとされている、中世末期から近世にかけて栄えた上町遺跡があり、その海側にあたる大場遺跡でも関連する遺跡があることが想定されていたところです。

発掘調査の結果では、上町遺跡よりも少し時期の下った江戸時代中期頃の遺構、遺物が多量に発見されました。調査区内には入江のような地区もみつかっており、出土陶磁器の中には優品もかなり含まれていることから、船着場的なものがあったと考えられています。また、古い佐野の町場の一端を画すると思われる溝なども見つかっており、近世の佐野の町域を考える上でも貴重な資料が得られたといえます。この調査成果が当地域の歴史の解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、泉佐野市、南海電気鉄道株式会社、地元自治会をはじめとする関係者各位に、多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成２年３月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
理事長　仁賀奈　祐　吉

例　　言

1．本書は、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業、泉佐野市都市計画道路事業および関西国際空港連絡鉄道南海分岐線事業における代替地造成に伴う大場遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、南海電気鉄道株式会社（以下、南海電鉄とする）の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもとに財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3．調査は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課技師岡本敏行を担当者とし、平成元年11月12日に現地調査に着手し、平成２年３月31日に全ての事業を終了した。

4．調査にあたっては、泉佐野市教育委員会、南海電鉄泉佐野工事事務所および地元関係各位の協力を得たほか、当協会が別に委託して調査を進めている日根荘総合調査の一環として日下雅義立命館大学教授をはじめとする古環境研究会、ならびに玉谷　哲氏から直接現地にて種々のご教示を受けた。記して感謝の意を表する。

5．調査は、国土座標第Ⅵ系を基に地区割りを実施している。したがって方位はすべて座標北を示し、標高はＴ．Ｐ．値（東京湾標準潮位）で示した。

6．本書で用いた遺構略号は、当協会独自の発掘調査規程に基づくもので、今回使用したものは次の通りである。なお、遺構番号は調査時につけたものをそのまま使用している。

　　ＯＯ：土坑　　ＯＳ：溝　　ＯＷ：井戸　　ＯＸ：その他

7．本書で用いた土壌色は、小川正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖５版』（1976）による。

8．遺構写真は主として調査担当者が、遺物の写真撮影は小倉　勝が行った。

9．本書の執筆・編集は岡本があたったが、出土遺物のうち近世の土器・陶磁器については、森村健一が執筆した。また、木器の実測については今村道雄の援助を受けた。

10．遺物には通し番号を付けており、本文と挿図番号・写真番号は一致する。

11．調査にあたっては、写真・実測図等の記録を作成するとともにカラースライドを作成している。広く利用されることを希望する。

目　　次

序　文

例　言

第1章　はじめに…… 1

　1．調査に至る経過…… 1

　2．調査の方法…… 2

第2章　遺跡の環境…… 2

第3章　遺　跡…… 5

　1．調査の概要…… 5

　2．層　序…… 5

　3．遺　構…… 7

第4章　遺　物…… 14

　1．中世以前の土器・陶磁器…… 14

　2．近世の土器・陶磁器…… 16

　3．瓦　類…… 21

　4．木製品…… 21

　5．石製品…… 25

　6．土製品…… 27

　7．金属製品…… 29

第5章　まとめ…… 30

挿図目次

第１図　泉佐野市位置図……1
第２図　調査位置図……3
第３図　調査区位置図……3
第４図　調査地土層断面柱状模式図……6
第５図　05—ＯＳ内瓦質管実測図……8
第６図　302—ＯＸ北壁土層断面図……10
第７図　Ｆ地区におけるラグーン（501—ＯＸ）断面模式図……12
第８図　604—ＯＸ実測図……13
第９図　土器実測図（１）……15
第10図　土器実測図（２）……16
第11図　墨書陶磁器……18
第12図　四耳壺片……19
第13図　瓦類実測図……20
第14図　木製品実測図（１）……22
第15図　木製品実測図（２）……23
第16図　木製品実測図（３）……24
第17図　石製品実測図……26
第18図　土錘実測図……27
第19図　泥面子拓影……29
第20図　鉄鍋実測図……29

表目次

土錘型式別出土点数表……28

図版目次

図版１　遺跡 調査地周辺垂直写真

図版２　遺跡 調査地全景

図版３　遺跡 Ａ地区 全景

図版４　遺跡 Ａ地区 01—ＯＸ護岸石列

図版５　遺跡 Ｂ地区 全景（上）・中央部遺構群（下）

図版６　遺跡 Ａ・Ｂ地区 05—ＯＳ内瓦質管（上左）・113—ＯＳ（上右）・Ｂ地区全景（下）

図版７　遺跡 Ｃ地区 全景（上）・302—ＯＸ北壁土層断面（下）

図版８　遺跡 Ｄ・Ｅ地区 Ｄ地区全景（上）・Ｅ—1地区（下左）・Ｅ—2地区（下右）

図版９　遺跡 Ｆ地区 全景（上）・Ｆ—1地区（下右）・Ｆ—2地区（下左）

図版10　遺跡 Ｆ・Ｇ地区 604—ＯＸ（上）・Ｇ地区全景（下）

図版11　遺物 土器・陶磁器（１）波佐見系（上左）伊万里系（上右）
三川内・小代系（下左）唐津系（下右）

図版12　遺物 土器・陶磁器（２）伊賀・信楽系（上左）丹波系（上右）瀬戸・美濃系（下左）
京焼風（下右上）中国製陶磁器（下右下）

図版13　遺物 土器・陶磁器（３）蛸壺（上左）堺・備前系摺鉢（上右）在地系土器（下左上）
中国製青・白磁（下左下）在地系土器（下右）

図版14　遺物 土錘・石製品 土錘（上）砥石・硯（下左）石臼（下右）

図版15　遺物 瓦類・土製品・金属製品・古銭

図版16　遺物 木製品（１）漆器椀

図版17　遺物 木製品（２）

図版18　遺物 木製品（３）下駄

図版19　遺物 木製品（４）

図版20　遺物 木製品（５）

付図　遺構全体図

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

大場遺跡は、大阪府泉佐野市西本町に所在する遺跡である。今回の調査は南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業・泉佐野市都市計画道路事業および関西国際空港連絡鉄道南海分岐線事業における代替地の調査である。本遺跡が周知されたのは極めて新しく、平成元年（1989）6月のことである。すなわち、泉州沖新空港建設に伴って、そのアクセスの一つとされる南海本線は泉佐野市大西付近で本線と分岐し、新空港に至る計画である。しかし、路線予定地内の地権者は農地としての代替地を希望していることから、南海電気鉄道株式会社（以下、単に南海電鉄という）では泉佐野市西本町内に以前より所有している旧帝国産業第2工場跡地をその代替予定地とした。

当該地では周知の遺跡は確認されていなかったが、総面積が約2万㎡にもおよぶことから、泉佐野市教育委員会では平成元年6月26日より6月29日にかけて試掘調査を実施することになった。それによると、かなりの攪乱をうけているものの、中・近世の遺構・遺物が多数検出され、これらの時期の集落の存在が推定されるにいたり、ここに新発見の遺跡として周知されることとなった[1]。それとともに造成に先立ち本格調査が必要と判断されたのである。今回の調査・報告がそれにあたる。また、遺跡名として新たに大場遺跡の名がつけられることになった。

調査は大阪府教育委員会等との協議の結果、南海電鉄の委託により（財）大阪府埋蔵文化財協会が実施し、現地調査を平成元年11月12日より開始し、平成2年3月25日に終了した。

第1図　泉佐野市位置図

2．調査の方法

調査は、大半が農地を目的とした盛土工法であることから道路予定地および水路切り替え部分のみを調査対象地とした。調査面積は約2500㎡である。盛土部分は機械掘削、それより下層は人力掘削を基本とした。遺物の取り上げ、遺構実測は国土座標を基準とした当協会独自の地区割りを利用しているが、調査対象地が極めて狭長であることから便宜的に第3図に示すようなA～Gの地区名を付している。以下の説明もこれによる。また、調査期間の短縮と正確でなければならないことから、調査地全体については航空測量を併せて実施している。

註

（1）泉佐野市教育委員会の御教示による。

第2章　遺跡の環境

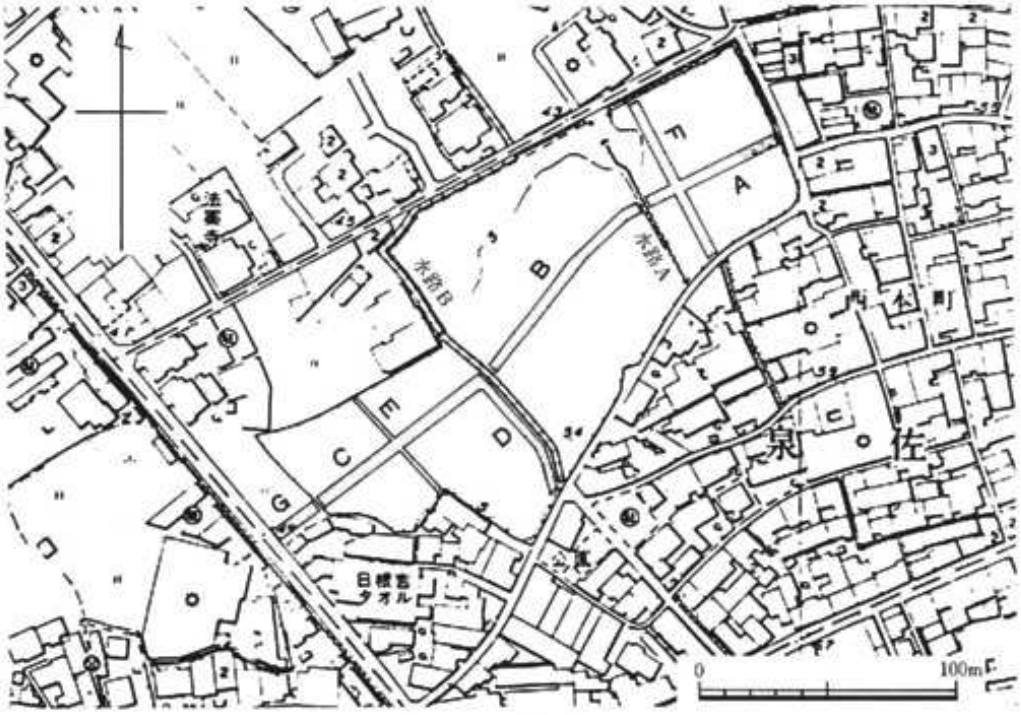
大場遺跡が所在する泉佐野市は大阪府の南西部に位置し、北と南東を貝塚市、東は熊取町、南西から南にかけては泉南市と接し、南東側は和泉山脈を隔てて、和歌山県と接する。北西側は大阪湾に面した北西―南東方向の細長い市域である。

当市域は和泉山脈に連なる山間部と中央の丘陵部、北西の臨海平野部の3区分に大別でき、そのうち大場遺跡は臨海平野部に位置する。市域には見出川・佐野川・樫井川の主要3河川が北流し、見出川は貝塚市と、樫井川は泉南市との境界をなしている。気候は、いわゆる瀬戸内型に属して温暖であり、タマネギ栽培などが盛んである。

大場遺跡の位置する臨海平野部は、河岸段丘と砂堆および一部の後背低地から形成されており、縄文海進以降海岸線の移動はほとんど認められない[(1)]。特に大場遺跡の位置する地域は、これらの地形が複雑に接した部分にあたり、海岸線までは約200mを測るにすぎない。

次に歴史的環境について目を移してみよう。周辺には松原遺跡や中開遺跡等の多くの遺跡が知られているが、これらについては、泉佐野市内における既往の調査報告・概報にすでに記されているので、ここでは紙数の関係もあり省略することにしたい。ただ今回の調

第2図　調査位置図



第3図　調査区位置図

査においては近世の遺構・遺物が多数検出されていることから、近世の泉佐野、特に旧佐野について今少し概観してみることにしたい。

中世、すでに佐野では月6回の市が開かれ、周辺地域における商品流通の中心となっていたが、町場として常設店舗による商業が行われるようになったのは中世末期から織豊時代にかけてのことである。町場であった佐野の住民には農商の兼業が多く、当初は町場としての発展の未熟さもあって、土豪を中心とした村落の支配体制がそのまま町場としての佐野を支配していた。

町場としての佐野は近世の元禄期になって急速に発展し、正徳3年（1713）の記録によれば、家数1666戸、人口8597人とされ、堺の5万人にはおよばないとしても、当時泉南では最も人口の多い町であった。貝原益軒の『南遊紀行』（元禄2年）には「佐野市場は貝塚より一里余。民家千件ありと云。富商多し。民家皆瓦葺にて宅せばく町をなさず。ただ家のみ多し」と記されており、当時の様子を的確に伝えているとされる。

またこの時期、有力な商人が現れ、その中の一つとされる食野家はその代表的な豪商とされる。この食野家は元禄期に全盛を迎え、今回の調査地より北西約150mに位置する第一小学校がその屋敷跡とされ、周辺には、「いろは四十八蔵」と称される多数の蔵が立ち並んでいたという。後述するように今回の出土遺物の大半はこの時期のものであり、また出土量も多く、なかには特筆されるものもかなり含まれることから、食野家との関係が想定される。

さらに付け加えるならば、佐野が町場、特に在郷町として発展した要因として、泉南随一の漁港であったことも見逃せないであろう。

註

（1）和歌山市立博物館学芸委員額田雅裕氏の御教示による。

参考文献

・泉佐野市役所『泉佐野市史』昭和32年

・有坂隆道他編『角川日本地名大辞典 27 大阪府』昭和58年

・大阪府史編集専門委員会編『大阪府史』第5巻　昭和60年

・直木孝次郎・森杉夫監修『大阪府の地名』日本歴史地名大系 28　昭和61年

第3章　遺　跡

1．調査の概要

今回の調査は、前章で記したように段丘と砂堆の接点部分にあたるが、実際の調査区は大半が段丘の縁辺部にあたり、砂堆部分は検出されなかった。しかし、A地区とF－1地区では海岸砂州背後のラグーン状の低地（01・07・501—OX）を検出した。[1]

ラグーン状低地と段丘の境には、近世以降のものであるが、石列や杭列が検出されている。段丘部分で検出された遺構は、中世以降のもので、それ以前のものは、全く検出されなかった。しかしながら、後述するようにラグーン状低地の堆積土内からは、古墳時代～奈良時代の遺物も少量出土しており、また、大半の遺構が中世以後の耕作に関連したものであることから、すでに削平されていた可能性も残されている。

水路A（付図参照）を境として、それより北側、すなわち、A・F地区では近世の遺構が主に検出された。これは、水路Aが旧佐野村の町場を画する溝であったことに関連するものであろう。[2] さらに付け加えるならば、B地区とC地区の境をなす水路B（付図参照）は町場のさらに外側を画していた溝のなごりとされる。[3]

B・C・D・E・G地区は、出土遺物より鎌倉時代以後、今日帝国産業第2工場が建設されるまでは、水田もしくは畑地であったと考えられる。これらの地域では、耕作地であるということから出土遺物は極めて少ないが、C地区南西角で、これら耕地の灌漑用水のための溜池状遺構（302—OX）の一部を検出した。本遺構からは、江戸時代中期を中心とした多量の陶磁器類と共に多数の木製品が出土して注目される。

2．層　序

調査対象地は極めて長いことから、土層の堆積状況は各地点によってかなり異なるが、基本的には、次の8層に分層できる。

第I層　旧帝国産業第2工場建設時の盛土である。50～100cmの厚さを測り、G地区を除く全面で観察される。

第II層　旧帝国産業第2工場が建設される以前の旧耕作土で、ほぼ全域に観察される。G地区では、現在も耕土として使用している。層厚10～30cmを測るが、G地区を除いては

工場建設時にかなり削平されているようである。

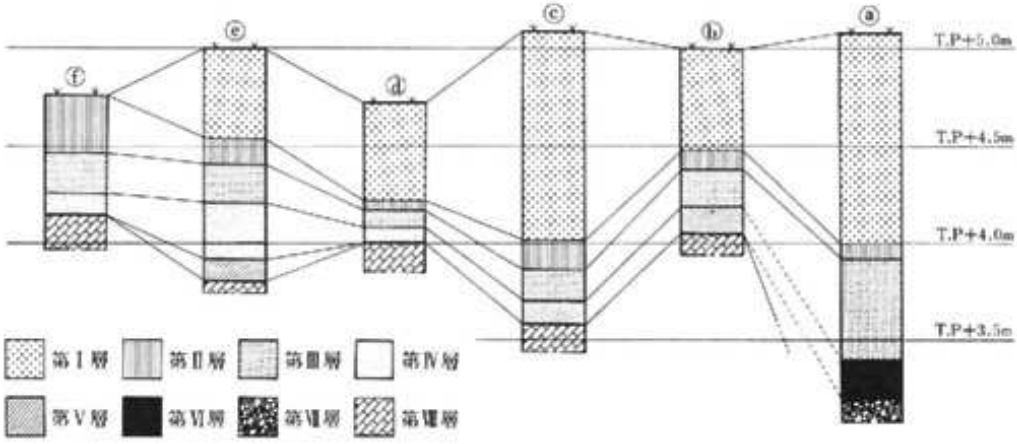
第Ⅲ層　近世の堆積層である。全域で観察されるが、A・F—1地区の沖積（ラグーン）部分と段丘部分では堆積状況がかなり異なる。前者、すなわち沖積部分では暗灰色を基調とした粘土で、細分が可能である。層厚50cm前後と厚く、陶磁器等の多量の遺物が出土する。と共にラグーンの完全埋没が近世後半から末頃であることが知られる。後者の段丘部分は茶灰色を基調とした微砂質シルト層で、耕作土であった可能性が強い。層厚10～20cm前後を測るが、遺物の出土量は少ない。

第Ⅳ層　中世の堆積層で、A・F地区以外の全域で観察される。茶褐色を基調とした微砂質シルトで、本来の遺物包含層に相当するものである。層厚7～20cmを測り、瓦器・青磁等の13～15世紀代の遺物を包含する。

第Ⅴ層　中世前半の堆積層である。C地区の南半部のみに堆積し、層厚10cm前後を測る。黒褐色を基調とした粘土で、滞水堆積を示すことから水田面であったと考えられる。

第Ⅵ層　中世以前の堆積層で、細分が可能である。黒色粘土を基調とし、沖積低地部分のみ観察されるが、A地区では部分的にしか認められなかった。調査した範囲内で、最も厚く堆積している部分はF—1地区の海側で、約50cmを測る。古墳時代中期から中世の遺物を包含するが、これらは概して上層部分からの出土で、下層部分には植物性の有機質が多量にみられる。

第Ⅶ層　沖積低地部分の堆積層であるが、掘削深度の関係もあり、下層確認の断ち割り調査のみでしか確認していない。緑灰色の粘土を一部に含んだ砂礫層で、調査した範囲内では遺物の出土はみられなかったが、植物遺体を多量に確認した。層厚15cm以上を測る。



第4図　調査地土層断面柱状模式図（実測地点は付図参照）

第Ⅷ層　いわゆる地山の段丘層である。黄色粘土を基調とするが、沖積低地部分に接する縁辺部分では礫が多量に含まれている。

3．遺　構

検出した遺構は、中世のものと近世以降のものに大別できる。中世のものは、溝等の耕作に関連したものが大半で、建物などの集落に関係した遺構は検出されなかった。近世に属する遺構群も直接建物等の遺構は検出されていないが、町場に関連すると考えられる溝等がいくつか検出されている。また、中世の遺構同様に耕作関連の遺構が多数検出されているが、これらは、溜池や野井戸で、中世の遺構とは、若干異なるものである。以下、地区ごとに記す。

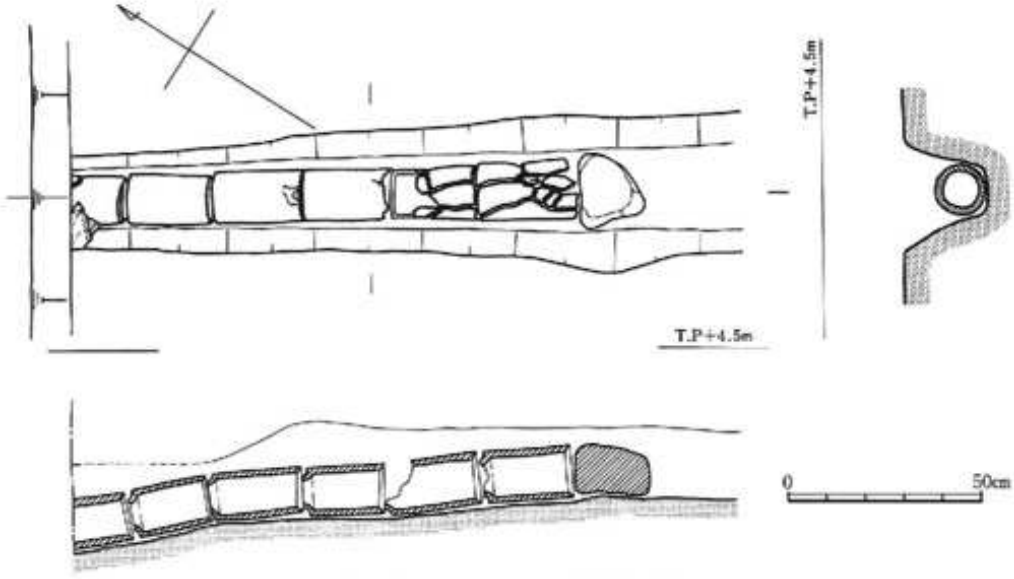
（1）A地区

01—ＯＸ（付図）　人為的な遺構ではないが、中央部から東側にかけて検出したラグーン状の後背低地である。後述する07・501—ＯＸと一連のものであるが、調査段階でそれぞれ別番号を付したため、ここでは、混乱を避けるためそのままの遺構番号を使用している。従って説明も別個に行うが、堆積状況については、501—ＯＸ（Ｆ地区）で包括しているのでそちらを参照して戴きたい。

当該地では、南側から北側へ徐々に深くなり、調査した範囲で、最も深い部分で70cmを測る。南側汀線部分に拳大～人頭大の比較的偏平な自然石を並べて、陸地部分と明確な境をなしている。本石列は調査段階では１段しか検出できなかったが、本来は２段以上であった可能性も残される。また、石列内側（ラグーン側）の岸部分にはいくつかの杭が残存している。本堆積層上部からは江戸時代中期を中心としたその前後の遺物が多量に出土し、下部からは少量の古墳時代～中世後半の遺物が出土する。

02—ＯＳ（付図）　段丘の縁辺部、沖積低地（ラグーン）の汀線に沿って検出した円弧状を呈した溝である。幅30cm、深さ15～20cmを測り、断面Ｕ字形を呈する。埋土は2.5Ｙ5/2暗灰黄色砂質シルトで、近世以降と考えられる陶磁器片が２点出土した。05—ＯＳと重複し、それより新しい。

05—ＯＳ（第５図）　中央部やや西よりで検出した北西—南東方向の溝である。総延長6.0mを検出し、北西端はラグーン501—ＯＸに流れ込み、南東側は調査区外に延びる。幅30cm、深さ20～25cmを測り、断面逆台形を呈する。北西端から1.5m内には、６ヶの瓦質



第５図　05―ＯＳ内瓦質管実測図

管が接続した状態で設置されており、その南東端には15×20cm大の偏平な石が据えられている。この石は瓦質管を固定する目的と瓦質管内部にゴミ等が流れ込まないようにするための濾過機能を有していたと考えられる。

瓦質管はいわゆる玉縁式の丸瓦をあわせた形式で、半載されずに断面が円形のままのものを使用している。瓦質管の接合には、玉縁部分の凹凸を利用している。本溝内の埋土は、2.5Ｙ5／2暗灰黄色砂質シルトで、近世以降の瓦・陶磁器片が出土する。02―ＯＳと重複し、それより古い。

07―ＯＸ（付図）　南東部からＢ地区北西部にかけて検出したラグーン状の後背低地で、01・501―ＯＸと一連のものである。当該部分では、東側から西側方向に深くなり、調査した範囲内で、最も深い地点で約60cmを測る。本地区では、他のラグーン（01・501―ＯＸ）部分と異なり砂の堆積が多く、最終的に人為的に埋められた痕跡が認められる。汀線部分には08―ＯＳが平行に走り、01―ＯＸ同様江戸時代中期を中心とした時期の遺物が多量に出土した。

08―ＯＳ（付図）　07―ＯＸの汀線に沿って検出した北東―南西方向の溝である。総延長12.0mを検出し、両端は自然消滅する。幅50cm、深さ10cm前後を測り、断面Ｕ字形を呈する。埋土は5Ｙ4／1灰色粘質シルトで、遺物は出土しない。その位置関係より、01―ＯＸで検出した護岸列石の掘方と考えられ、石はすでに抜き取られたものであろう。

09―ＯＳ（付図）　南東部南隅で検出した直角に屈曲した溝である。総延長2.5mを検

出し、北西端は攪乱坑によって仕切られている。幅20cm、深さ5cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は、7.5YR3／1黒褐色粘質シルトで遺物は出土しなかったが、埋土の状況より中世の時期まで遡る可能性がある。

（2）B地区

遺構に伴う出土遺物は少ないが、検出した遺構は層順より（大半の遺構は第4層直下で検出）すべて広義の中世の時期に属するものである。

106—OS（付図）　中央部で検出した南西—北東方向の溝である。南西端は攪乱坑に切られ、北東側は調査区外にのびる。深さ25cmを測るが、幅については北側肩部を検出したのみで不明。埋土は2.5YR4／1赤灰色粘土と2.5Y8／1灰白色細砂の上下2層に分層でき、上層（赤灰色粘土）より瓦器小片が1点出土した。

113—OI（付図）　中央部で検出した北西—南東方向の埋石暗渠である。本遺構のみ、第4層上面で検出した。総延長3.0mを検出し、北西端は後世の削平のため消滅し、南東側は調査区外にのびる。幅40cm、深さ20cmを測り、断面U字形を呈する。内部には5～15cm大の円礫を埋め込む。遺物は出土しないが、層順より近世以降のものであろう。

115—OO（付図）　北東部で検出した平面隅丸方形状の土坑と考えられるが、北西側は調査区外である。検出面での幅は1.5m、深さ15cmを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10YR4／1褐灰砂質シルトと10YR5／1粘質シルトの上下2層に分層でき、遺物は出土しない。

120—OS（付図）　南西端部で検出した北西—南東方向の溝である。総延長1.5mを検出した。北西側は攪乱坑に切られ、南東側は調査区外にのびる。幅20cm、深さ10cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は2.5Y6／1黄灰色粘質シルトで、遺物は出土しない。

121—OS（付図）　中央部で検出した北西—南東方向の蛇行溝である。総延長5.0mを検出し、北西側は調査区外にのび、南東端は106—OSと接続する。幅50～60cm、深さ5cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は、2.5YR4／1赤灰色粘土で遺物は出土しない。

123—OS（付図）　中央部で検出した南—北方向の溝である。総延長4.7mを検出し、北側は攪乱坑に切られ、南端は、106—OSに接続する。幅30cm、深さ5cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は10YR5／1褐色粘土で遺物は出土しない。

小溝群（付図）　北東部で検出した幅20cm、深さ5cm前後の小溝群である。埋土は10YR5／1褐灰色粘質シルトで、土師器・瓦器等の小片が少量出土する。概して北東—南西方

向のものである。これらは水田耕作に関連したものであろう。

ピット群（付図）　ここでいうピット群とは中央部で検出した不定形のピット群を指す。埋土は10ＹＲ5／1褐灰色粘土で、遺物は出土しない。これらのピットがいかなるものであるかは明確でないが、イネの根株痕の可能性が高い。

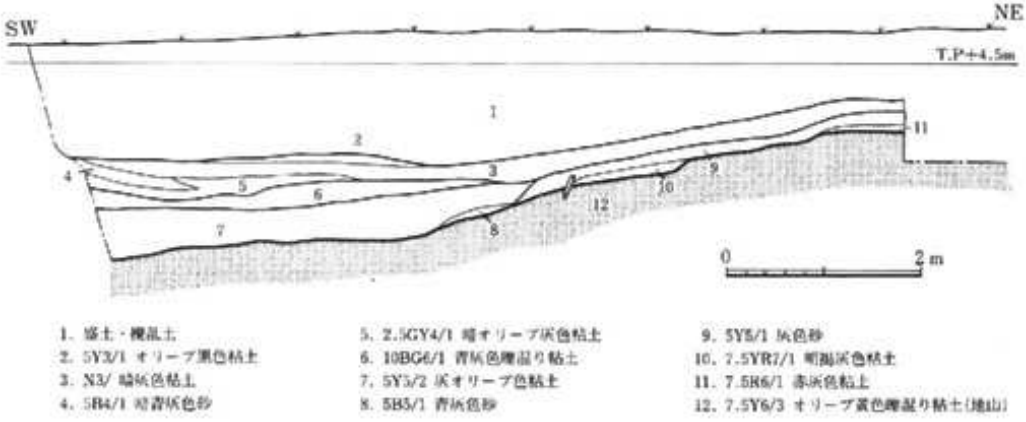
（３）Ｃ地区

301―ＯＳ（付図）　南東隅で検出した南―北方向の瓦質管が埋め込まれた溝である。南側は調査区外にのび、北側は攪乱坑に切られているが、本来は302―ＯＸに接続するものであろう。幅30cm、深さ20cmを測り、断面Ｕ字形を呈する。埋土は7.5Ｙ6／1灰色砂質シルトである。瓦質管は長さ20cm前後のいわゆる玉縁式の丸瓦の半截していないものであり、凸凹を利用して組み合わせたものである。

302―ＯＸ（第６図）　南西隅で検出した溜池状遺構である。大半が調査区外のため形状、規模等については不明であるが、調査した部分で最も深い所で1.0mを測る。埋土は基本的に上・中・下の３層に分層でき、さらに細分が可能である。汀線部分には護岸用の杭が打ち込まれている。下層を中心に各層から多量の江戸時代中期前後の土器・陶磁器・木製品等が出土するが、層位的な時期差は認められない。

303―ＯＯ（付図）　北東端で検出した平面略円形の土坑である。直径1.5m、深さ25cmを測り、２段に掘られている。埋土は10ＹＲ5／1赤灰色粘質シルトで遺物は出土しない。

304―ＯＳ（付図）　南東部で検出した北東―南西方向の溝である。総延長3.0mを検出し、北東側は調査区外にのび、南西側は攪乱坑に切られている。幅50cm、深さ10cmを測り、



第６図　302―ＯＸ北壁土層断面図

断面U字形を呈する。埋土は10YR5／1赤灰色粘質シルトで遺物は出土しない。

（4）D地区

本地区検出の遺構は層順及び出土遺物から大半が中世の時期に属するものである。

201—OS（付図）　中央部で検出した北東—南西方向の溝である。幅1.3m、深さ25cmを測り、東側がテラス状の2段掘りを呈する。また、中央部には島状の高まりが認められる。埋土は2.5Y6／1黄灰色砂質シルトとN5／1灰色砂質シルトの上・下2層に分層でき、遺物は出土しない。本溝を境として西側は一段低い。水田面を区画すると共に用水路的なものであろう。

204—OS（付図）　中央部で検出した北東—南西方向の溝である。幅2.0～3.5mを測り、南側から北側に徐々に幅広になる。深さは20cmを測り、断面U字型を呈する。埋土は10YR5／1褐灰色粘質シルトで遺物は出土しない。用水路的なものであろうか。

205—OS（付図）　南東隅で検出した東—西方向の溝である。南側肩部は調査区外のため規模等については不明であるが、深さは最も深いところで25cmを測る。埋土は10YR5／1褐灰色粘質シルトで遺物は出土しない。埋土の状況及びその方向からE—2地区検出の401—OSと同一の溝と考えられる。用水路を兼ねた周辺地域を画する溝であろう。

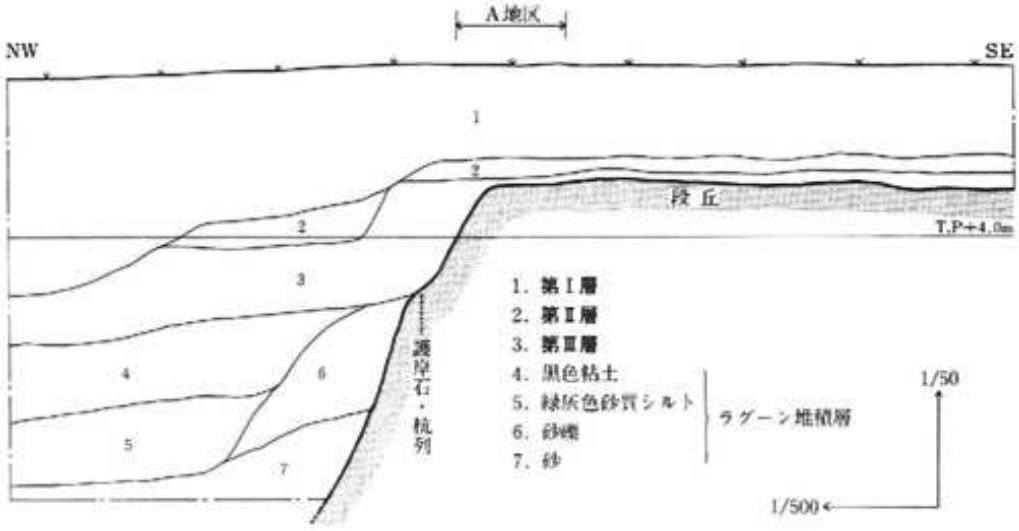
ピット群（付図）　中央部より海側寄りを中心に多数検出した。直径10cm前後、深さ5cm前後の平面略円形のものが最も多い。埋土は大半が褐灰色を基調とした粘質シルトで、土師器片を含むものがある。

小溝群（付図）　水田耕作に伴うもので、概して201—OSを境として北西部は北東—南西方向、南東部は北西—南東方向を示すものが多い。幅15cm前後、深さ3cm前後のものが最も多く、褐灰色系の粘質シルトが堆積する。

（5）E地区

本地区は水路切り替え部分にあたり、C地区を挟んで北西部をE—1地区、南東部をE—2地区とする。なお、E—2地区は大半が攪乱である。

401—OS（付図）　南東端で検出した東—西方向の溝である。幅1.8m、深さ25cmを測り、断面U字型を呈する。埋土は、10YR5／1褐灰色粘質シルトで遺物は出土しない。埋土の状態及びその方向からD地区検出の205—OSと同一の溝と考えられる。



第７図　Ｆ地区におけるラグーン（501―ＯＸ）断面模式図

（６）Ｆ地区

本地区はＡ地区を挟んで北西部をＦ―１地区、南東部をＦ―２地区とする。Ｆ―１地区はラグーン状の後背低地で沖積地にあたり、Ｆ―２地区は洪積段丘縁辺部にあたる。

501―ＯＸ（第７図）　Ｆ―１地区で検出したラグーン状の後背低地で、Ａ地区検出の01・07―ＯＸと一連ものである。当地区では南東から北西方向に徐々に深くなり、調査した範囲では（危険防止のため完掘は行っていない）2.0m以上を測る。汀線部分よりやや内側（ラグーン側）には、近世以降のものと考えられる護岸用の木杭が多数打ち込まれている。堆積状況は上層部分には、第Ⅲ層に相当する暗灰色粘土が堆積する。本層には江戸時代中期～後期の遺物が多量に含まれており、ラグーン埋没時期をある程度示唆している。その下部には黒色粘土が約50cmの厚さで堆積し、その上部分には少量ではあるが古墳時代中期～中世の遺物を包含している。その下部には無遺物ではあるが、植物遺体を多く含んだ緑灰色砂質シルトが堆積し、さらにその下部には砂・礫層が堆積する。

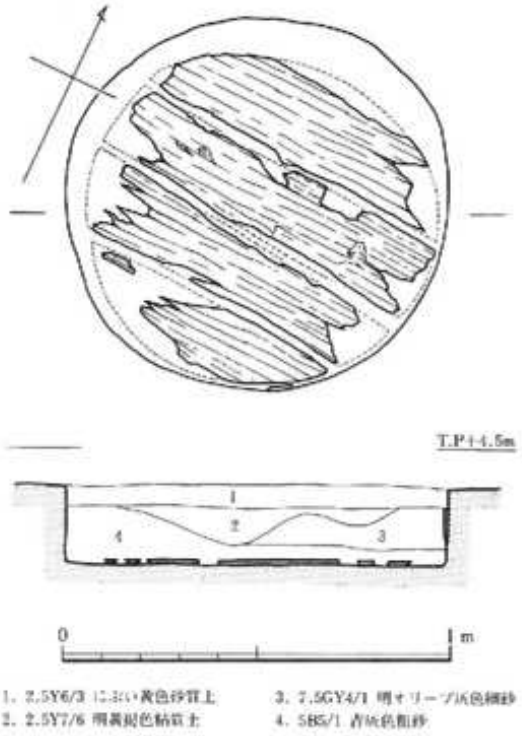
601―ＯＳ（付図）　Ｆ―２地区中央部北よりで検出した北東から南東方向に屈曲した溝である。総延長6.0mを検出し、両端部は調査区にのびる。幅1.0～2.0m、深さ８cmを測り、断面Ｕ字形を呈する。埋土は2.5Y6／3にぶい黄色砂質シルトで、近世の土器・陶磁器及び土錘が２点出土した。

604―ＯＸ（第８図）　Ｆ―２地区中央部で検出した埋桶である。底部のみが遺存し、側板の痕跡が一部認められるが上部は削平・腐食等で欠失する。底板は４枚を組み合わせ

たものである。掘形は桶の大きさぎりぎりに掘られたもので、直径1.0m前後の平面円形を呈し、深さ検出面より20cmを測る。埋土は4層に分層でき、近世の瓦・陶磁器・土器及び漆器椀の小片が出土した。

（7）G地区

701—OS（付図）　中央部東よりで検出した北東—南西方向の溝である。総延長14.5mを検出し、南西端は土坑状に幅広になり調査区外にのびる。北東端は徐々に浅くなり、自然に消滅する。幅60cm、深さ20cmを測り、断面U字形を呈する。埋土はSY5／1灰色砂質シルトと10YR3／1黒褐色粘質シルトの上下2層に分層でき、瓦器・土師器等の中世の遺物が少量出土する。704—OSと重複し、それより新しい。



第8図　604—OX実測図

702—OW（付図）　南端で検出した素堀りの野井戸である。直径2.5m前後の平面円形と考えられるが、一部は調査区外である。埋土は人為的に埋められた粘土で、深さ1.5m以上を測る。近世以降と考えられる土器・陶磁器・瓦・土錘・鉄釘等が出土する。701—OSと重複し、それより新しい。

703—OW（付図）　中央部東寄りで検出した平面円形と考えられる野井戸である。直径2.3m、深さ1.5m以上を測るが、東側は調査区外である。埋土は人為的に埋められた粘土で、近世以降の瓦・陶磁器が出土する。701—OSと重複しそれより新しい。

704—OS（付図）　北東隅で検出したわずかに湾曲する北—南方向の溝である。総延長3.5mを検出し、両端部は調査区外にのびる。幅30cm、深さ10cmを測り、断面U字形を呈する。埋土はN2／0黒色粘土で遺物は出土しない。701—OSと重複しそれより古い。

小溝群（付図）　南西隅で南—北方向の4条の小溝を検出した。幅15～20cm前後、深さ3cm前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色を基調とした粘質シルトで遺物は出

土しないが、層順等から中世の耕作に関連した溝と考えられる。

註

（1）立命館大学教授日下雅義先生に検出した沖積低地がラグーン跡との御教示を得た。また、当低地では、日下先生を中心とする古環境研究会によって花粉、珪藻、プラント・オパール、古植物および^{14}C年代測定のための分析用の資料が採取されており、後日その成果が発表されるものと期待される。

（2）玉谷哲氏の御教示による。

（3）前掲註2に同じ。

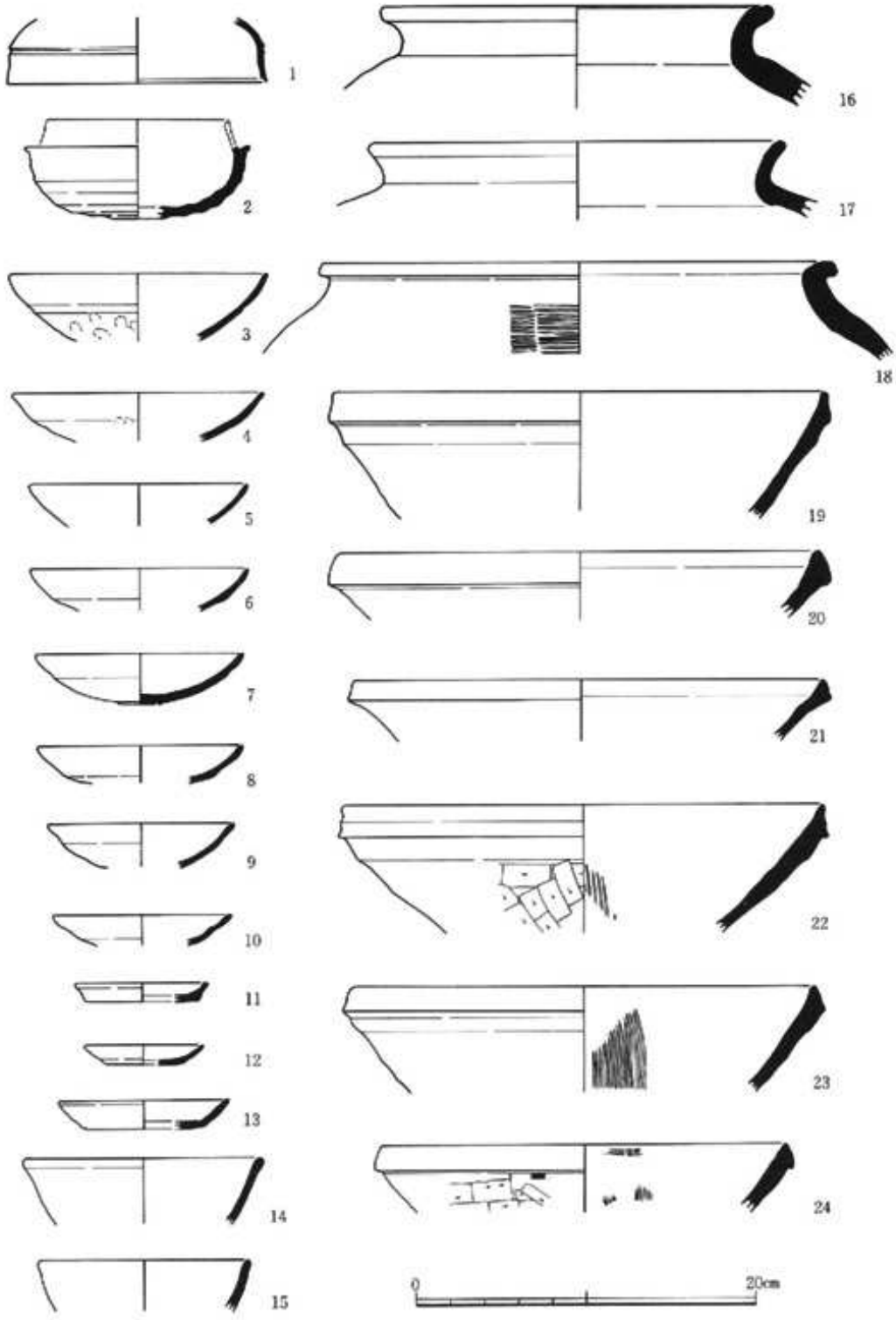
第4章　遺　物

1．中世以前の土器・陶磁器（第9・10図、図版13）

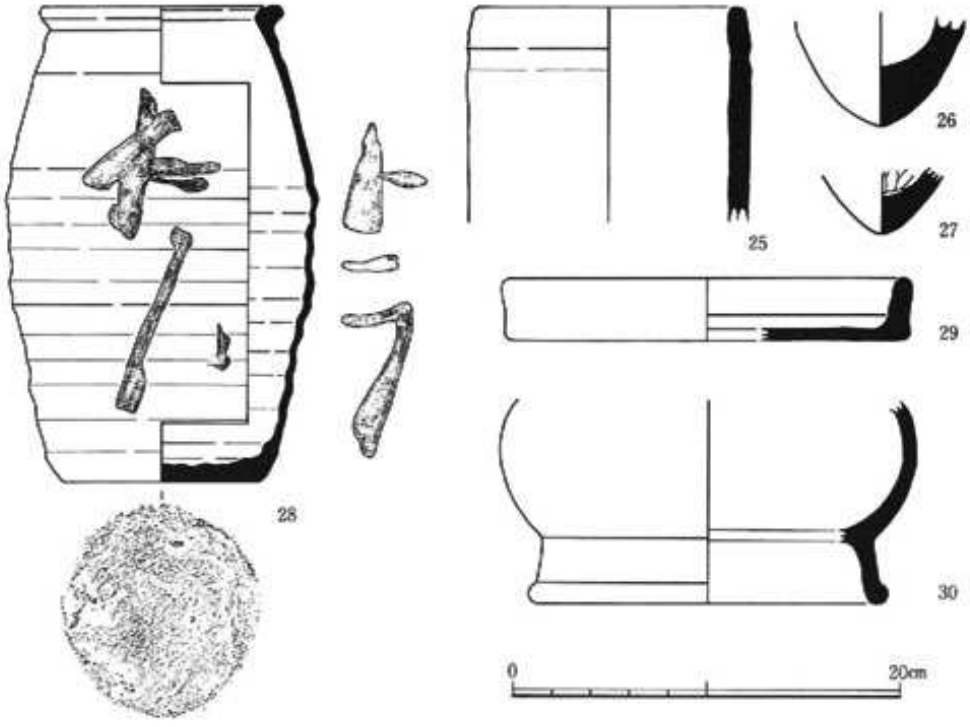
遺構に伴うものは極めて少ない。大半は包含層から出土したものである。1は須恵器の杯蓋、2は須恵器の杯身で口縁部を欠くが、比較的長く立ち上がるものであろう。共にI形式の範疇に属する。3～9及び32は瓦器椀である。12世紀末～14世紀代の各時期のものがあり、7には重ね焼きの痕跡が残る。10～12は土師器の小皿である。口縁が比較的大きいものと小さいものがある。11の底部外面と口縁部外面境には強いナデ調整のため稜が残り、近世の可能性もある。

13は白磁の小皿である。口縁部と見込みの境には凹線を巡らす。13世紀代のものであろう。14・15・31は龍泉窯系の青磁碗である。14・15は無文で14～15世紀代、31の外面には蓮弁が施されており、13世紀代であろう。33は15世紀代の青磁香炉である。底径5.6cmの小型品で、龍泉窯系である。

16・17は口縁部が外反する須恵器の甕である。16の口縁端部はわずかに屈曲して凹面をもつ。13世紀代のものであろうか。18は瓦質の甕であるが、炭素の吸着はほとんどなく、須恵質に近い。15世紀代のものである。19～21は東播系の須恵器すり鉢である。22～24は瓦質のすり鉢で内面にすり目を施す。14～15世紀代のものであろう。25～27・34～36は土師器タコ壺である。26・27は尖底、36は丸底ぎみの底部を持つ。中世の範疇に属するものであろう。



第９図　土器実測図（１）



第10図　土器実測図(２)

１～３・６・７・16・18・22・25・26・34～36は01―ＯＸ、10・13は501―ＯＸ、他は包含層からの出土である。

２．近世の土器・陶磁器（第10図、図版11～13）

陶磁器を出土した遺構は、後背低地である01・07・501―ＯＸと302―ＯＸに大別される。出土状況から考えると、近世家屋の解体後に廃棄されたものである。出土した陶磁器の種類は中国製陶磁器、伊賀・信楽系、擂すり鉢、唐津系、三川内系（江永）、小代、御深井、瀬戸・美濃系、嬉野系、備前系、丹波系、伊万里系、京焼風信楽（瀬戸・美濃系？）、波佐見系と不明陶磁器がある。なお、出土した陶磁器の量は、コンテナ60杯に達している。

中国製陶磁器　花弁文を削り出した瑠璃釉餅花手大鉢（37）は、18世紀代の優品である。鉛ガラスによって使用当時に於て接合された牡丹唐草文青花皿（38）は、18世紀中葉前後と考えられるカラックである。

伊賀・信楽系　トチリ鍋蓋のうち、図版中央のものはやや大形で、ツマミは花弁文をプレスする。鍋は口縁部のみで、外面はとびかんなの上に淡い緑色の発色に仕上がる灰釉を

丁寧にかけている。器厚は2㎜と極めて薄く、胎土は緻密である。土瓶蓋には、円形の斑点を残す褐色の吹墨を行ったものと、白泥のインチンで文様を施し透明釉のみかけるものがある。平行蓋・身とも外面はとびかんな文で、身の方は外面を鉄釉、内面灰釉をつける。内面無釉の香炉は、器高6.7㎝で、外面は3条の白泥インチン文、2条の染付、1条の鉄釉が巡らされている。土鍋も数点出土しており、これらの遺物は総て19世紀前半である。

堺すり鉢　器高が9.5㎝の「サヤ」とすり鉢（大・小）の2種類がある。底部外面には砂粒、外面は左方向のヘラケズリが目立つ。胎土は長石・石英の砂粒が多く、焼成も備前焼の光沢を有するものと赤褐色のレンガ風の2種類がある。高台を取り付けた大形品、さらに注口に印刻を押したすり鉢が各1点出土している。製作年代は白神編年I型式（18世紀中頃）とII型式（18世紀後半～19世紀前半）に納まる。

唐津系　17世紀後半～18世紀前半の二彩唐津、刷毛目、三島唐津象嵌の3種類が見られる。碗は白泥による波状紋を基調としている。4段文様帯をモチーフした象嵌大鉢は、高台が方形である。後出する遺物は2段の文様帯を施す。後者の大鉢の高台は台形をなし、共に外面下半には鉄釉のみを施している。なお、高台は無釉である。

三川内系　胎土は陶磁器質で黒灰色を呈し、黒色鉱物粒が多く吹き出す。染付も紺色でコバルト色とはほど遠い。碁笥底の碗は、内外共に白泥を用いた回転刷毛目を施し、見込みは蛇の目剝ぎにしている。総釉で重ね焼き痕のない丸碗（口径10.1㎝、器高6.9㎝）の他に5.5㎝の浅碗がある。陶器質のためピンホールが多く、見込み蛇の目釉切りが見受けられる。これは江永一木原西窯と考えられる製品で18世紀中頃～後半に位置づけられる。

小代系　腰より下は無釉、高台内に著しい右回りロクロ痕が特徴である。鉄釉と白泥を網目状に掛けた1点（19世紀前半）を除いては内外面共灰釉を掛け、所々鉄釉を流し掛け、後に透明釉で仕上げた天目茶碗の器種に限定される。これらは18世紀中頃～後半におきたい。

御深井系　19世紀前半代の水鉢は、波状文の印刻の上に灰釉を掛け、さらに緑釉を流し掛けている。口径が30㎝前後に復元できる大型品である。他に施釉方法が同じであるが、大半部が無釉の深手の盤がある。

瀬戸・美濃系　記載した陶磁器は、概ね19世紀前半である。緑釉牡丹貼付け文水鉢は内面が無釉である。染付鉢は見込みに目跡が見られ、内面のみ白泥→染付→透明釉の順で仕上げる。腰より下は無釉である。見込みに目跡を残し底部無釉と灰釉で総釉仕上げした鉢が2点である。鎧手掛分碗は全体に鉄釉を掛け、その上に外口縁と内面に褐釉の掛分した

ものである。その他には胎土が軟質の19世紀後半にはいる鉄釉吹墨文鉢も出土している。

嬉野焼系　18世紀前半～中頃と思われる緑釉碗は内面が灰釉で、高台内は無釉、畳付け部には糸切りを残す。透明釉の碗には、見込み蛇の目釉切れが見られる。

備前系　17世紀前半の徳利底部片には、灰かぶりと、ヘラケズリを丁寧に施す。17世紀後半と考えられるすり鉢には外口縁下に重ね焼きによる変色がある。他に、17世紀前半と考えられる口径7.0㎝、器高4.3㎝の鉢と、水指しも出土している。

丹波系　徳利は鉄釉のみのものと、内外とも褐色釉を掛け白泥で文字を書いたもの、さらに全面に鉄釉を掛けた後褐釉で仕上げた３種が出土している。19世紀前半の甕は、総て口縁部を直立させ、端部の上半を平らに調整する。釉の掛け方には、A～Dの４種のバリエイションがある。（A）内面は鉄釉、外面は鉄釉の後透明釉を掛けたもの。（B）内外とも鉄釉の後透明釉仕上げのもの。（C）内面を灰釉（うぐいす色）、外面を鉄釉掛けのもの。（D）全面に鉄釉を掛け口縁端部のみ２回目の釉掛け、褐釉を掛けないものである。外に口縁部を内側に折り曲げ肥厚させたすり鉢である。ヘラケズリは、左方向ですり目が４本／１㎝のものであるが、下半が欠損しているため信楽の可能性を有する。17世紀後半代のものであろう。また、大型で内外とも粗雑な鉄釉を掛けたねり鉢も出土している。

伊万里系　４点が出土したにすぎない。淡緑色釉に仕上げた平皿は、白泥の細いインチンで朱文、波文、花鳥文を描いている。18世紀半とした牡丹唐草文染付けは、輪花皿であり、畳付けのみ無釉でハリがない。内外とも山水文を描写した17世紀後半の碗は、畳付けが無釉で、やや幅広い台形にカンナケズリしたものである。17世紀初頭の２つの剣環と牡丹文をびっしり配した小瓶は、頸部に黒漆による接合痕が認められる。この用法は、17世紀後半～18世紀初頭に流行した接合法である。

京風信楽系　胎土目跡と釉調だけで判断する限りでは、中野泰裕氏が主張する、瀬戸・美濃系の範疇に属してもいい陶磁器である。この手の文様は、備前系の鉄絵による下絵の山水文とは異なり、赤・緑を基調とした草花文の太筆タッチの上絵付けである。１点のみ濃緑・赤で見込みに絵付けしたものがある。全ての底部は、無釉である。文様構成は、以下のように多種多様である。見込みに３か所の目跡を残し、緑と水色で水仙文の上絵付けし、器厚が６㎜と分厚いもの。見込みに赤上絵付けによる草文、緑と赤の草花文、緑のみの絵付けという色使いがある。また、無文で透明釉だけ

第11図　墨書陶磁器

で仕上がり、高台内に「大い」と墨書きしたものが見受けられた（第11図）。器種は、碗のみで製作年代は19世紀前半である。また、肥前系に比して高台径が小さいのも特徴である。

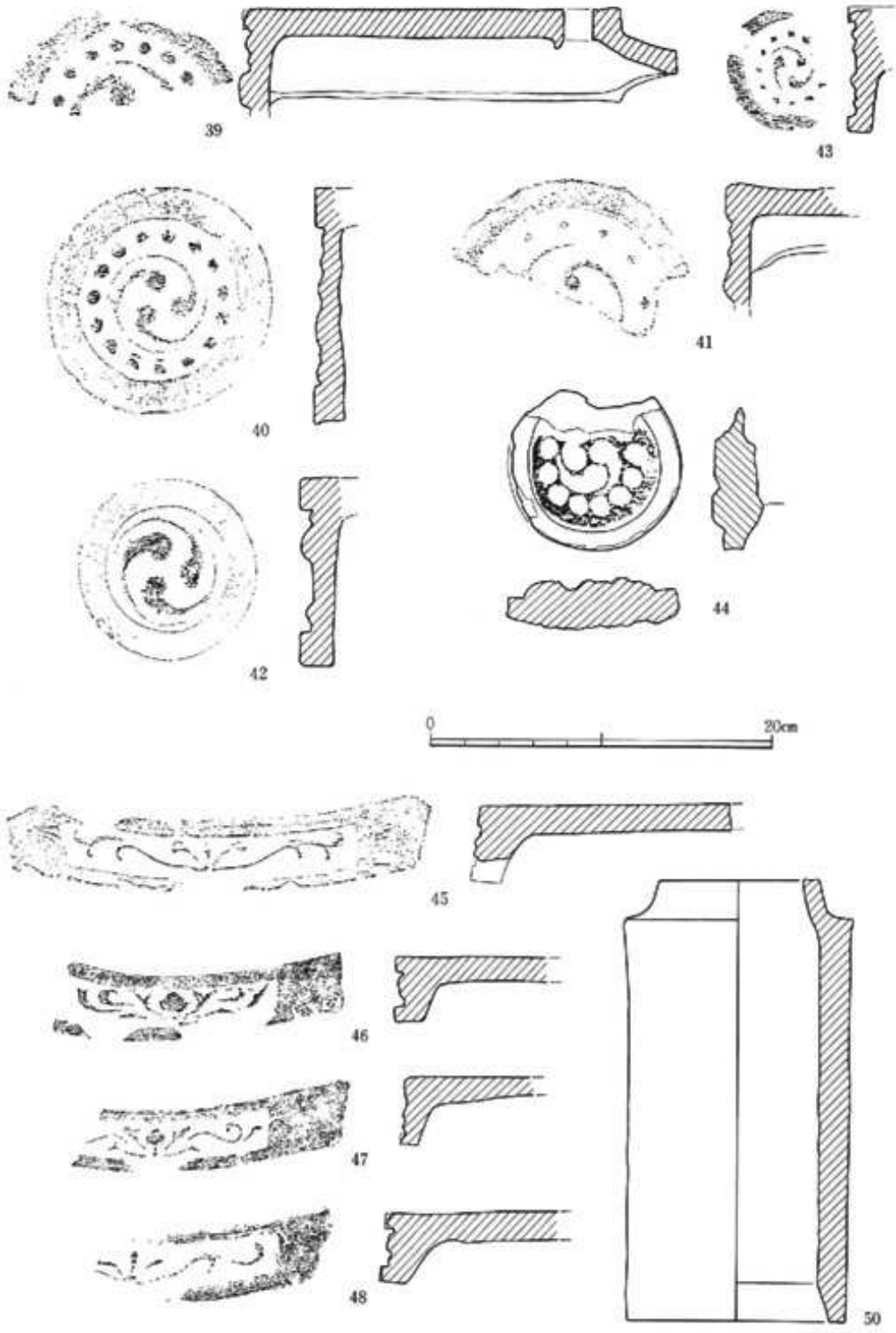
波佐見系　陶磁器の内で最も量を占める焼物である。伊万里対波佐見対江永の出土比率は１対100対５前後の概観である。図版にした遺物について見ると、特長的なのは鉢の存在である。青磁染付碗（1750～1790年）は、四方襷文、二重界線、五弁花文があり、高台内に渦福字銘を記し、後貫入が著しい。同器種の蓋も同一文様構成である。染付平鉢は口径14.5㎝、器高6.5㎝で、無釉の蛇の目凹形高台に形成し、口縁内は丁寧な四方襷文を施し、外は丸文である。波佐見としては、胎土・釉調が上手である。染付丸皿（口径13.6㎝、器高4.1㎝）は、見込みに五弁花文をコンニヤク印判で押しており、コバルトの発色が極めて下手っぽい。染付丸文筒茶碗は、内口縁に略四方襷文、腰に松葉文を描き、口径8.0㎝、器高6.5㎝を計測する。口径10㎝、器高5.2㎝、製作年代が1740～1780年とされる染付２重網目文丸碗は、黒色鉱物粒の吹き出しが見込みに認められる。染付梅花文丸碗は、使用当時の黒漆による接合痕を有する口径9.9㎝、器高5.5㎝の小碗に部類する。染付梅花文鉢（口径14.8㎝、器高7.6㎝）にも黒漆による接合痕があり、また、Ｃ地区302―ＯＸ出土の盤にも見られる。染付草花文鉢は、口径16.0㎝、器高8.6㎝の大振りで、前記の染付梅花文鉢が高台に大明年製であったのに対し略福自銘をもつ。

不明陶磁器　産地不明の四耳壺がある（第12図）。胎土は白く、「ス」が多く軟質である。口縁端部は平坦で、二次焼成をうけて釉が流れている。

第12図　四耳壺片

在地系土器　十能（瓦質・土師）、瓦質火鉢（30）、土師質蛸壺、土師質皿、燈明皿等がある。また18世紀代に登場する柿釉皿も在地産出で、糸切り底仕上げである。土師質の蛸壺の内に「トラ」と墨書きしたもの（28）も糸切り仕上げである。

以上、出土した陶磁器類については、元禄から文化期に集中する。これは、今日多数残されている本地域の町家絵図（十数点があるとされる）の製作年代や調査地に隣接する墓地に残された石碑年代、さらに東側に接して存在したとされる豪商食野家の消長年代、または、当周辺地域における新田開発後における農民層の経済的成長とも一致する時期にあたり、極めて注目される。



第13図　瓦類実測図

3．瓦　類（第13図、図版15）

瓦類はコンテナにして５箱分が出土した。すべて近世以降のもので、大半は01—ＯＸから出土したものである。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦及び瓦管・瓦頭笵がある。

軒丸瓦（39～43）　すべて三巴文である。42は小振りで珠文が施されていない。43も極めて小型であることから桟瓦的なものか。39には釘穴が施されている。

軒平瓦（45～49）　すべて均整唐草文を施すが、中心飾り及び子葉の反転の形態は個々に異なる。45のみが302—ＯＸ出土で、他は01—ＯＸから出土したものである。

瓦頭笵（44） 01—ＯＸから出土した瓦質の瓦頭笵である。珠文を施した三巴文で、比較的小型のものである。当地域で直接瓦が製作されていたことを示す資料であろう。

瓦管（50）　05—ＯＳ及び301—ＯＳに使用された管である。05—ＯＳで６管、301—ＯＳで15管分を検出した。図示したものは301—ＯＳに使用された内の一管である。いわゆる玉縁式の丸瓦の半載していないもので、直径13㎝前後、長さ25㎝前後を測るものが最も多い。

4．木製品（第14～16図、図版16～20）

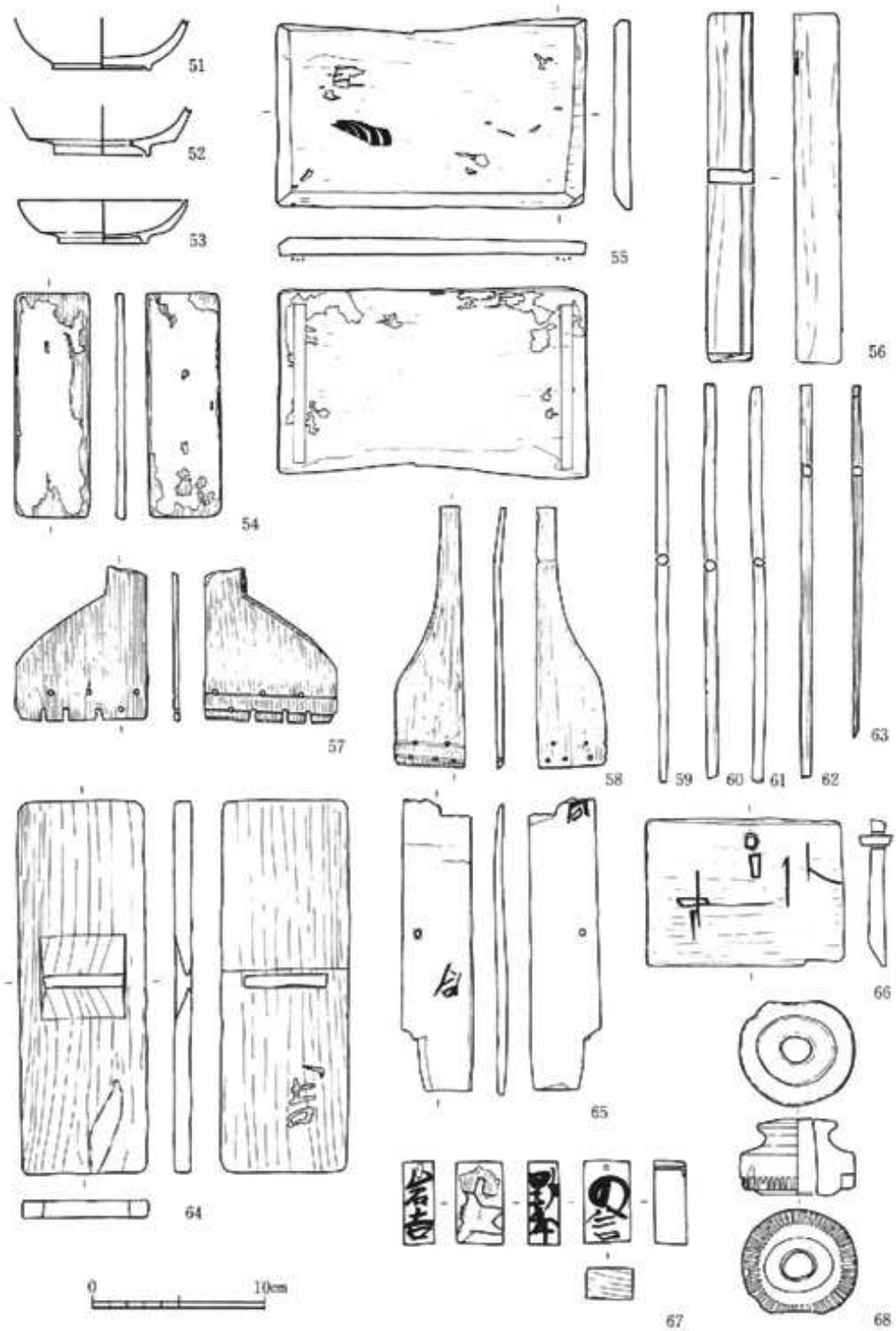
木製品は多量に出土した。出土品はすべて302—ＯＸから出土したものである。これらの木製品は共伴土器・陶磁器より江戸時代中期～後期に位置付けられるものである。

漆器椀（51～53・87～89）　黒漆椀（52・53・89）と朱漆椀（51・87・88）がある。朱漆椀は黒漆を塗った後に朱漆を塗ったものである。53は小型で皿に近い形態を示す。52の底部と体部外面境には稜を残す。

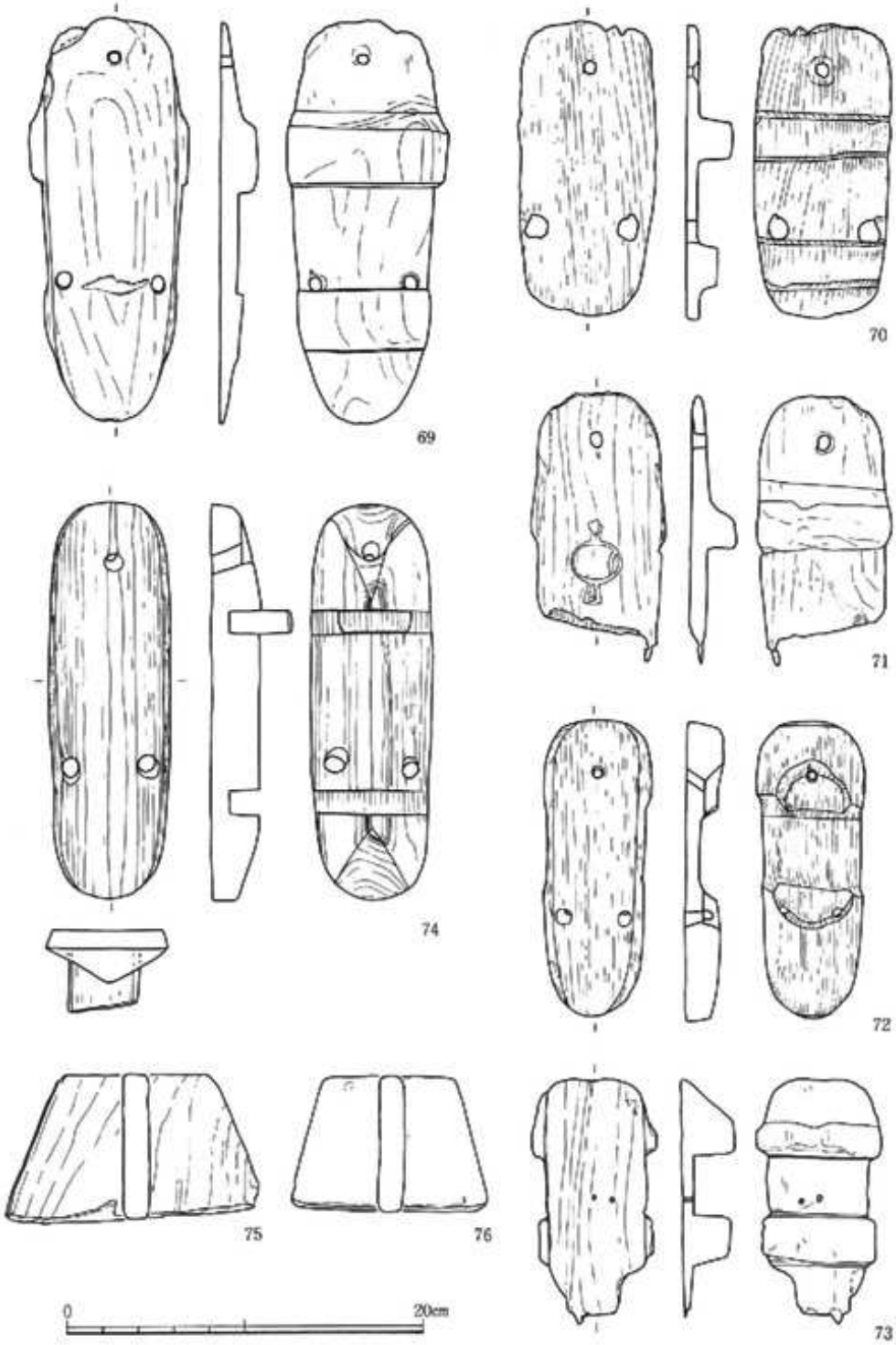
漆板・材（54～56）　箱等の一部と考えられるものである。54は表面に朱漆、裏面に黒漆を塗る。55は全面に朱漆を塗り、表面に黒漆で文様を施す。蓋と考えられ、裏面に嵌込み部分の取れた痕跡が残る。56は全体的に朱漆を塗った後に黒漆を塗ったもので、表面に凹線が施されている。

刷毛（57・58）　下部に刷毛部分を留めるための紐穴が２段に施され、さらに片面には紐を固定するための凹線が２段につけられている。58の把手部分には２小孔が穿たれており、紐穴であろうか。

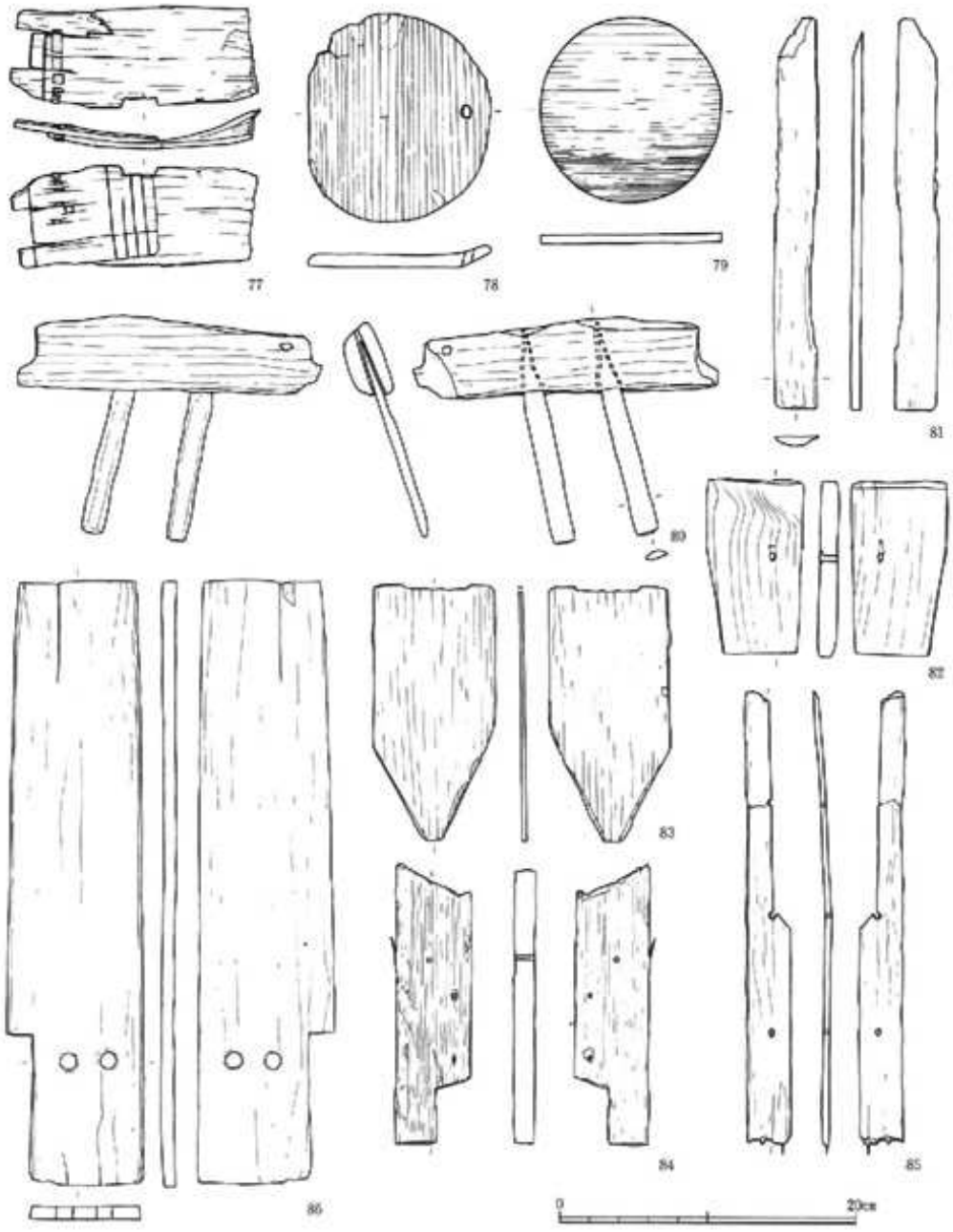
箸（59～63・91～95）　総数約20本が出土した。長さが23㎝前後のものが最も多く、断面は円形と四角形の両者がある。



第14図　木製品実測図（１）



第15図　木製品実測図（２）



第16図　木製品実測図（３）

鉋台（64）　平面長方形を呈したほぼ中央部に、上から下にすぼまるように四角形の刃部装着用の穴があけられている。厚さは１cmと極めて薄い。裏面下方に「吉」の墨書が認められる。おそらく名前を記したものであろう。

墨書材（65～67・100）　65は両者に墨書が認められるが、判読不明。直径２㎝の小孔があけられている。66は平面長方形の板材で、長辺の一辺が面取りふうに斜めになり、反対側の中央部には直径約１㎝の円孔が施されて、棒状のものが差し込まれていた。墨書は判読不明である。67は小型の角材で、四面に「岩吉」等の墨書が施されているが、そのうちの一面は墨書の部分が削られている。平面上方に小孔が穿たれており、木札的なものか。100は蓋と考えられる板材であるが、表面に墨書で円形文様が施されている。

下駄（69～76）　一木下駄（69～73）と構造下駄（74～76）がある。一木下駄は連歯下駄類（69～71）と庭下駄類（72）及び表付き類（73―鼻緒を通すための「眼」が穿たれていないもの）に分類できる。71には打出の小槌が陰刻されている。構造下駄は差歯下駄で露卯下駄と考えられる。75・76は歯部の一部である。

曲物（77～79・96～99）　77・98・99は側板の残欠で、樺皮で綴じられたものである。78・79・96・97は曲物の底もしくは蓋と考えられるものである。円形及び楕円形を呈する。78には円孔が穿たれ、側縁部がわずかに屈曲する。

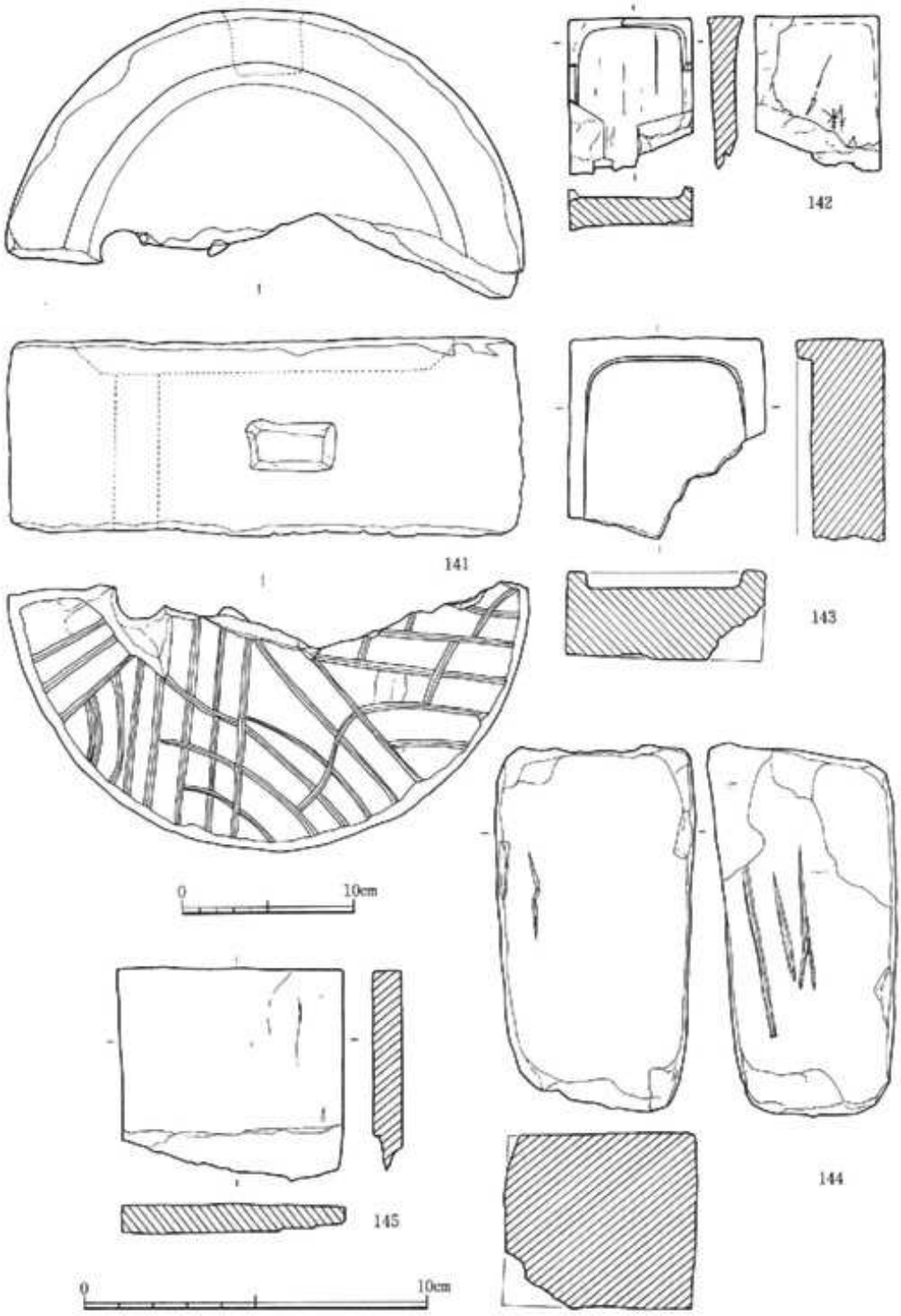
板・角・棒材（81～86・90・101～138）　大小さまざまなものが多量に出土している。86は桶の側板の一部で、紐穴が２孔あけられている。83は上縁部が凹み、下部は三角形に削られている。82・84・85・117・124には釘穴と思われる小孔が認められる。118には目違いのほぞ穴状の凹部がある。134にもほぞ穴を意識した凹部的な窪みがある。

杭（139・140）　自然木の先端を尖らしたものである。直径７㎝前後を測り、139は上部が欠失しているが、140で長さ90㎝を測る。

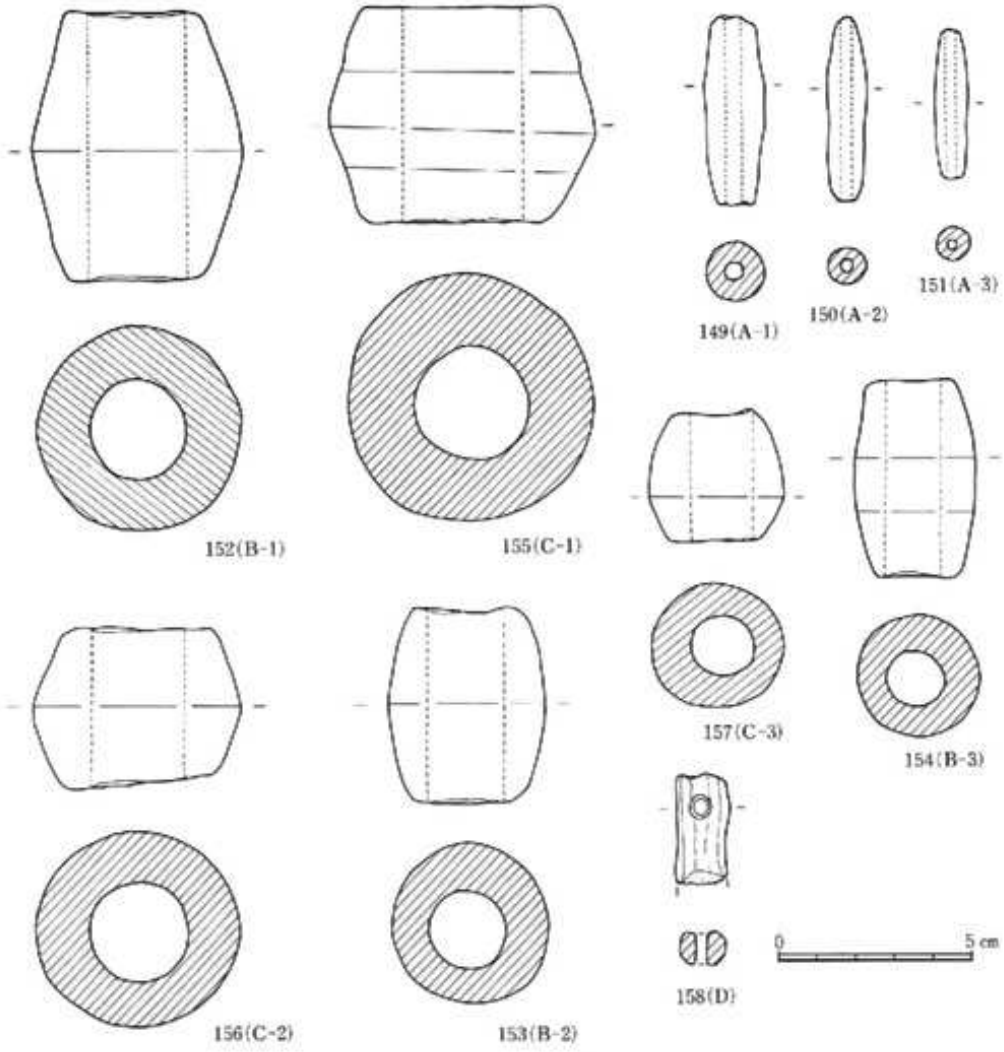
不明木製品（68・80）　68はつまみ状を呈し、中心部は中空である。下部には歯車状の刻み目が施されている。80は先の尖った棒板が２本差し込まれたもので、釘穴が残る。

５．石製品（第17図、図版14）

石製品には石臼・硯・砥石がある。石臼（141）は01―ＯＸから出土したもので、上臼にあたる。擂り目は、放射状にのびるものと蛇行状に曲線したものが交差する。硯（142・143）は平面長方形を呈し、共に陸にあたる部分の破片である。142は特に小振りであり、底部に「様」が線刻されている。２点とも01―ＯＸから出土したものである。砥石（144～148）は角柱状のもの（144・148）と平面長方形を呈した偏平なもの（145～147）に大別できる。すべてに擦痕が認められるが、特に144には研磨痕が明瞭に残る。145・148が302―ＯＸ、他は01―ＯＸから出土したものである。これら石製品の時期は、共伴して出土



第17図　石製品実測図（141のみ1／4、他は1／2である）



第18図　土錘実測図

した土器・陶磁器より概ね江戸時代中期前後に比定できよう。なお、材質については時間的な制約から未鑑定である。

6．土製品（第18・19図、図版15）

土製品には土錘・土人形・泥面子がある。特に土錘は海に近いこともあって多量に出土している。しかし、その大半は近世以降のものであり、中世以前のものはごく僅かである。

土錘　総数291点が出土した。これらは形態によってA～Dの4型式に分類が可能である。

《A型式》　側面がいわゆる管状のもので、大きさによってA—1・A—2・A—3型式に細分できる。

・A—1型式：長さ5.0㎝、幅1.5㎝前後のもの（149）。

・A—2型式：長さ5.0㎝、幅1.0㎝前後のもの（150）。

・A—3型式：長さ4.0㎝、幅0.8㎝前後のもの（151）。

《B型式》　中空で管状を呈するが、A型式より幅広のもの。大きさによってB—1・B—2・B—3型式に細分できる。

・B—1型式：長さ7.0㎝、幅5.5㎝前後のもの（152）。

・B—2型式：長さ5.0㎝、幅4.0㎝前後のもの（153）。

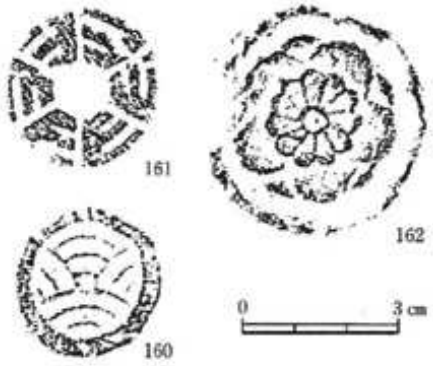
・B—3型式：長さ5.0㎝、幅3.0㎝前後のもの（154）。

《C型式》　B型式同様中空で管状を呈するが、長さが幅より短いもの。大きさによってC—1・C—2・C—3型式に細分でできる。

・C—1型式：長さ5.0㎝、幅7.0㎝前後のもの（155）。

地区＼型式		A			B			C			D	形態不明片	合計
		1	2	3	1	2	3	1	2	3			
A	包含層		6	2	1	3		1					13
	01—OX	1	45	9	27	3	1	20	4	1		2	113
	07—OX		1					1					2
B	包含層	1	2	4									7
C	包含層		16	2				1					19
	302—OX		41	1	4		1	1				1	53
D	包含層	2	9	4	1								16
E	包含層		1										1
F	包含層		5	3							1		9
	501—OX	2	31	2	7	1		1				1	51
	601—OX		2										2
G	包含層		2										2
	702—OW		3										3
合計		6	164	27	40	7	2	34	5	1	1	4	291

土錘型式別出土点数表



第19図　泥面子拓影

・C—2型式：長さ4.0cm、幅5.0cm前後のもの（156）。

・C—3型式：長さ3.0cm、幅3.5cm前後のもの（157）。

《D型式》　棒状の両端に円孔を穿ったもの（158）。

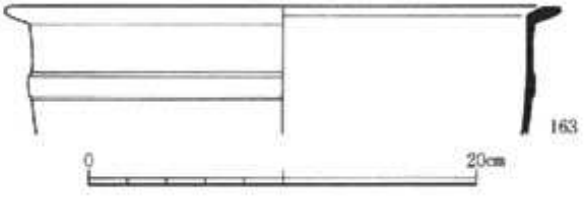
各型式の出土点数及び出土地区は別表の通りであり、A—2型式が最も多量に出土している。また、陶磁器同様01—OXからの出土が極めて多いことが知られる。

土人形（159）　01—OXから出土したもので、亀を表しているが頭部を欠失する。長さ4.0cm、幅4.0cm、厚さ1.0cmを測る。

泥面子（160～162）　01—OXから3点が出土している。160は他のものより若干大きく、直径4.0cmを測り、上面に押型による牡丹文を付ける。161・162は直径3.0cmを測り、それぞれに亀甲文、波形文を施している。

7．金属製品（第20図、図版15）

鉄鍋・鉄釘・古銭がある。すべて01—OXから出土したものである。鉄鍋（163）は口縁部が短く外反し、体部外面に幅1.0cmの凸帯が巡る。鉄釘（164）は長さ7.0cmを測り、断面四角形を呈する。古銭（165）は約1/2が欠失し、しかも摩耗が著しいため文字の判読は不可能である。



第20図　鉄鍋実測図

第5章　まとめ

大場遺跡は、今回の造成に先立って新たに発見された遺跡である。従って、その実態はこれまで全く知られていなかっただけに、道路予定地部分のみの狭長な調査区ではあったが、その意義は極めて大きかったといえる。しかしながら、検出された個々の遺構の性格や時期については充分に把握できたとはいえない。その反面、一方では広大な面積の中を縦横に調査区を設定したことになり、多くの知見を得たことも事実である。以下、ここではそれらを再度要約・列記し、今後の調査の布石としたい。

1．調査地は段丘と海岸低地の境に位置する。

2．今回検出された遺構・遺物は中・近世のものが中心であったが、01・501—ＯＸから古墳時代中期及び奈良時代の土器が少量出土していることから、周辺部に当該期の集落の存在が推定される。

3．当地における中世期の段丘部分は、大半が水田もしくは畑地であったようである。

4．従来より知られていた旧佐野村の町場としての南端部が今回の調査で事実であることが再確認された。

5．旧佐野が本来の町場として完成・発展したのは江戸時代中期以降である。

6．町場の発展にあわせて、江戸時代中期前後の遺物が多量に出土しており、その中には特筆される優品もかなり含まれていることから、元禄期に全盛を迎える佐野の豪商食野家との関係が想定される。ちなみに食野家の屋敷地は、今回の調査地より北西約150mに位置する第一小学校とされており、周辺には「いろは四十八蔵」と称される多数の蔵が立ち並んでいたという。それに関連して、今回検出されたラグーン状の低地（江戸時代には浅瀬の入江であったと思われる）が同小学校の方向に続いていることから、食野家の船着き場的なものがあった可能性が考えられる。

以上、大場遺跡の調査も緒についたばかりである。今後の調査・研究によってその実態が少しでも明らかにされていることを期待すると共に、また、同地周辺は昨今の関西新空港建設に伴って開発が盛んな地域でもあり、早急にその保護処置を講じていかなければならないであろう。

図　　版

調査地周辺垂直写真（S＝1：10000）

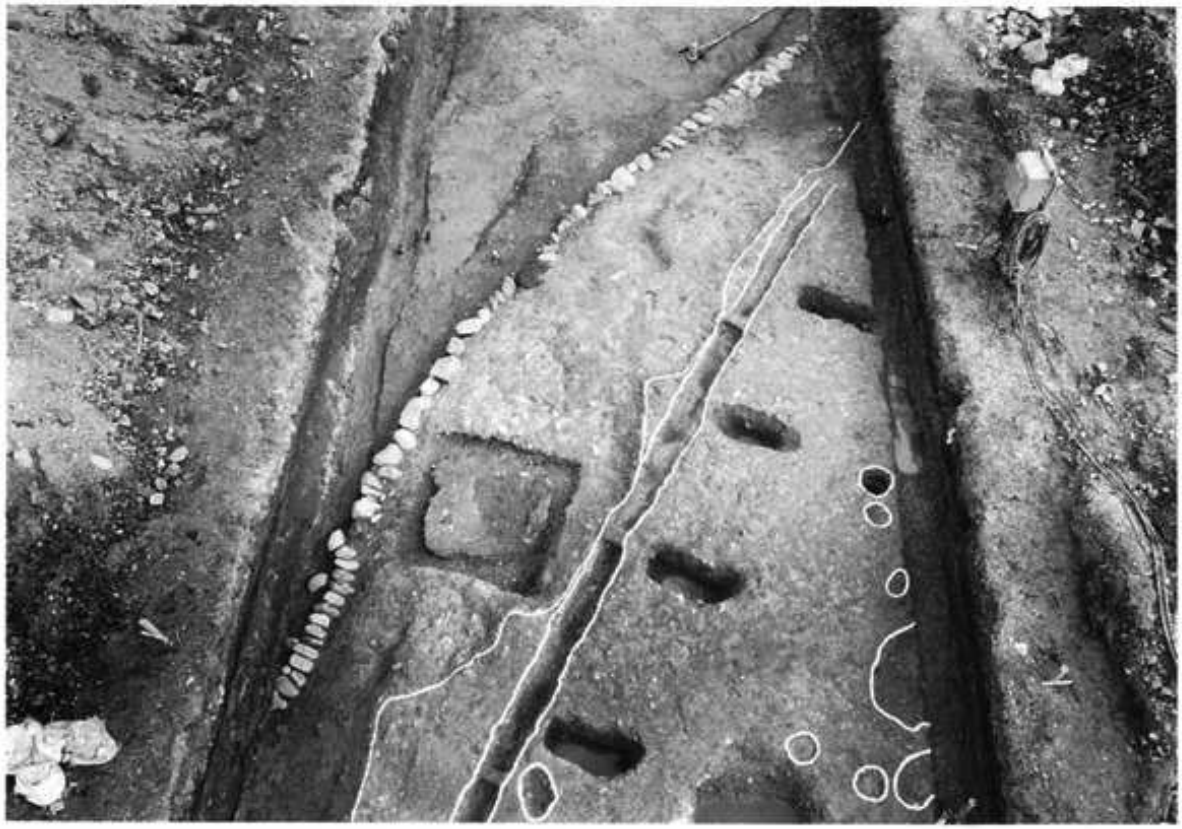
調査地全景（南西上空から）

調査地全景（北東から）

図版三　遺跡　A地区

全景（北東から）

01－ＯＸ護岸石列（東から）



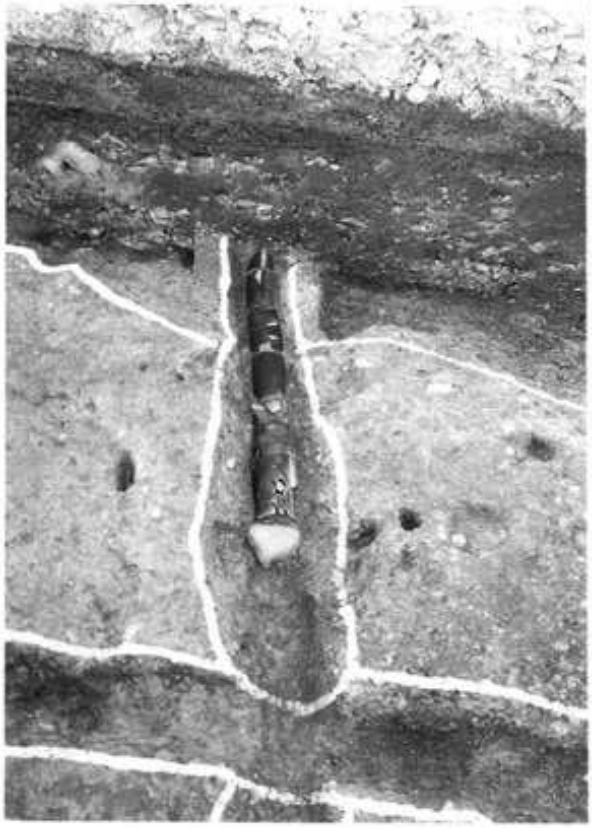
同上（西から）

図版五　遺跡　B地区

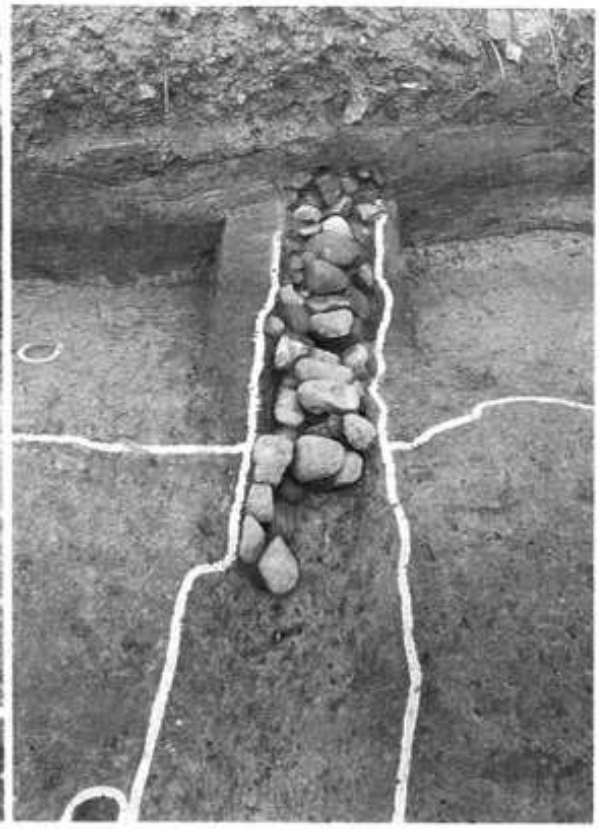
全景（北東から）

中央部遺構群（北から）

図版六　遺跡　A・B地区



05－ＯＳ内瓦質管（南から）



113－ＯＳ（北から）

Ｂ地区全景（南西より）

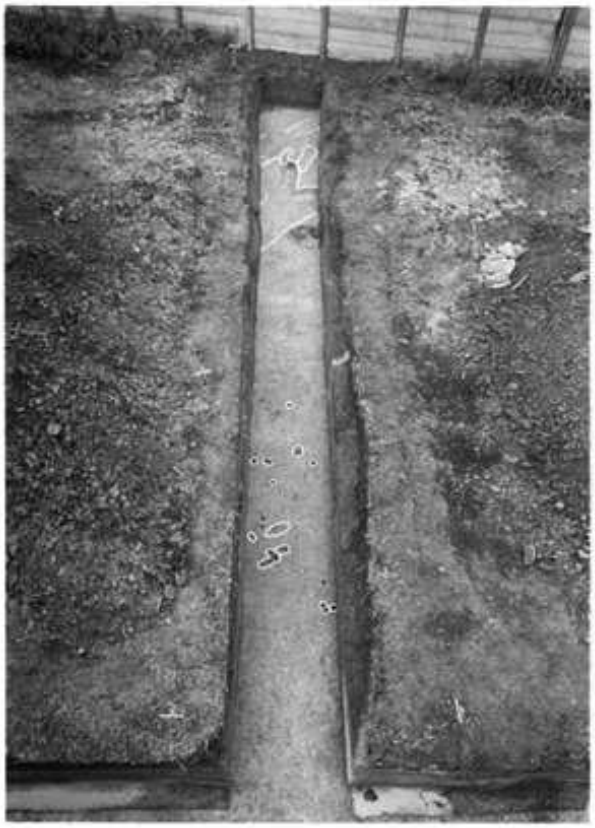
図版七　遺跡　C地区

全景（北東から）

302－ＯＸ北壁土層断面（南から）

図版八　遺跡　D・E地区

D地区全景（北西から）



E－1地区（南から）

E－2地区（北から）

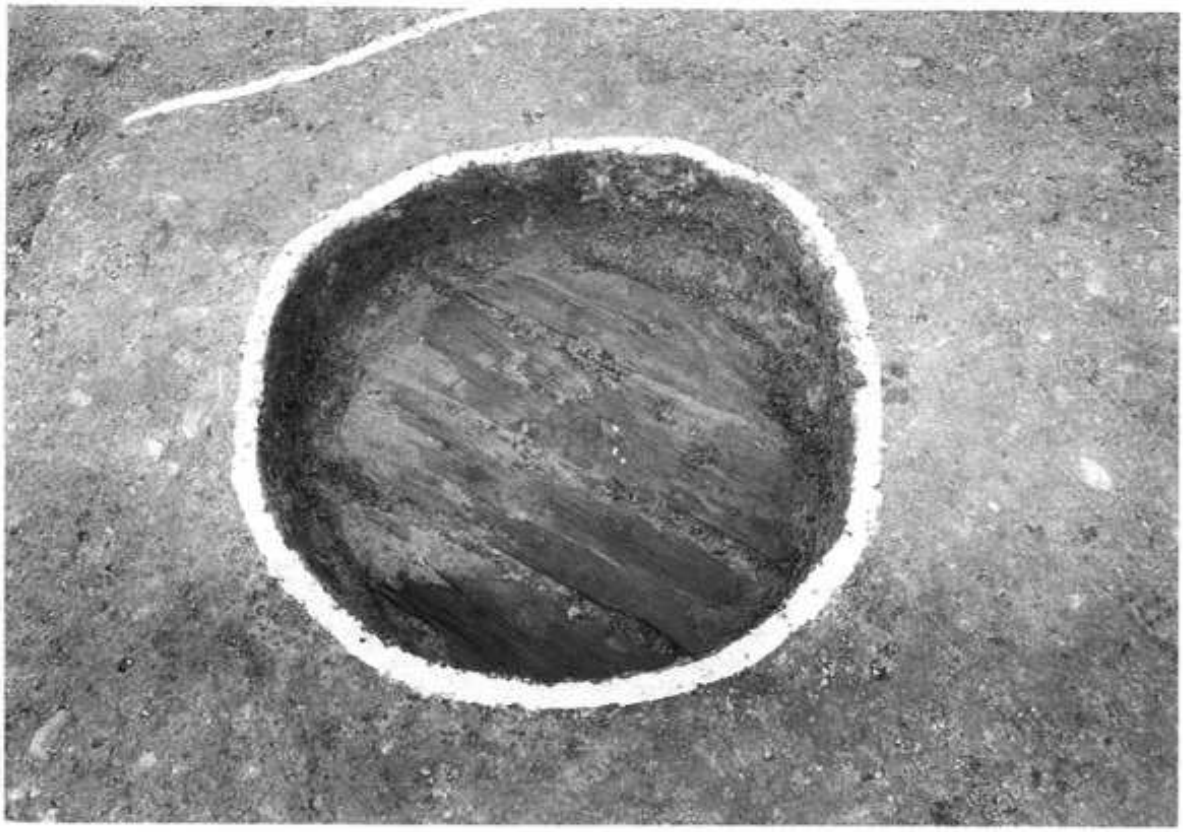
図版九　遺跡　F地区

全景（南東から）

F－2地区（北から）

F－1地区（南から）

図版十　遺跡　F・G地区



604－ＯＸ（南から）

G地区全景（北東から）

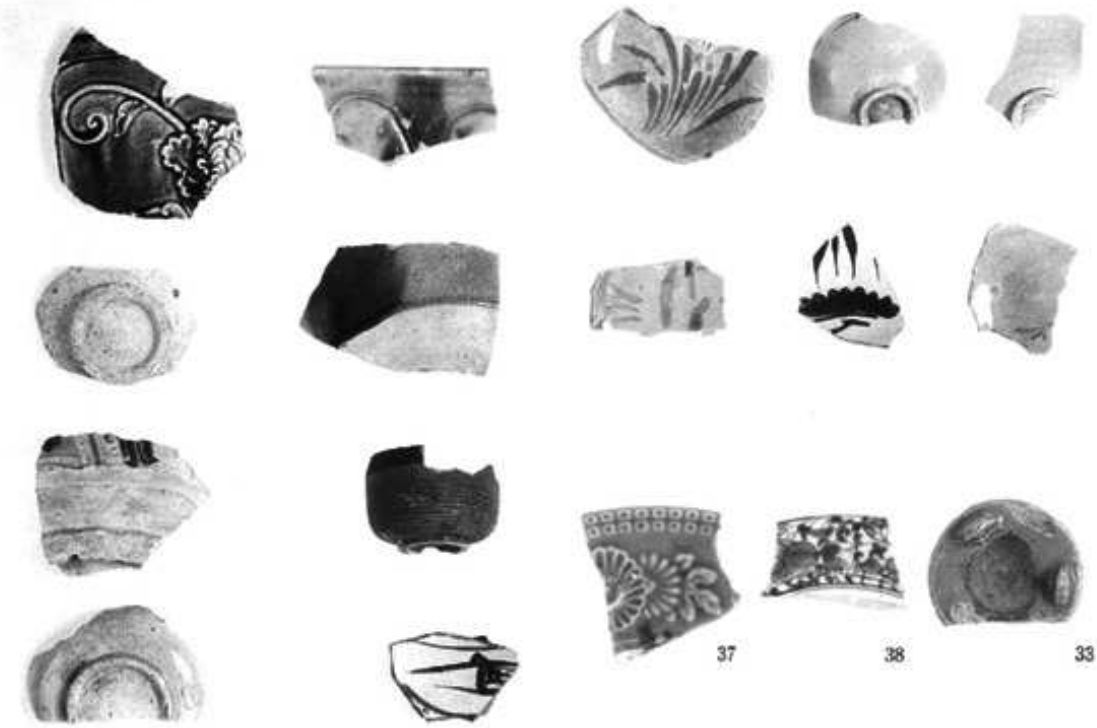
図版十一　遺物　土器・陶磁器(1)

波佐見系　　伊万里系

三川内・小代系　　唐津系

図版十二　遺物　土器・陶磁器(2)

伊賀・信楽系　　丹波系



瀬戸・美濃系　　京焼風(上)　中国製陶磁器(下)

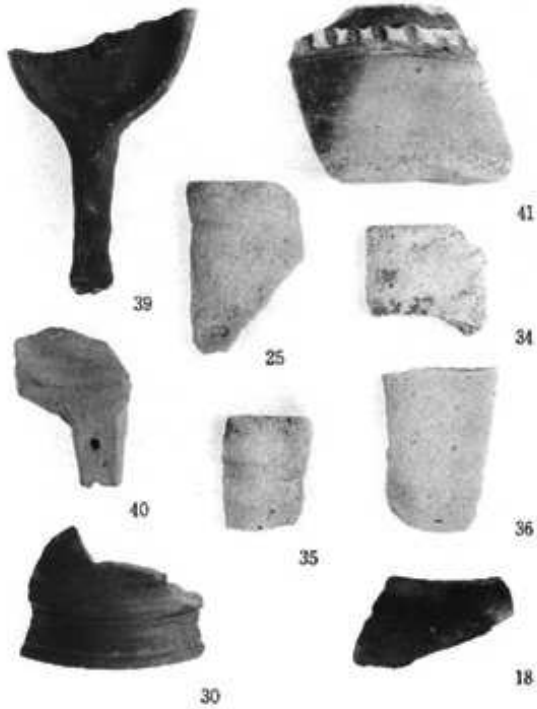
28

蚫壺(在地系)

堺・備前系すり鉢

18　7　17　22　32　20　24　23　13　31

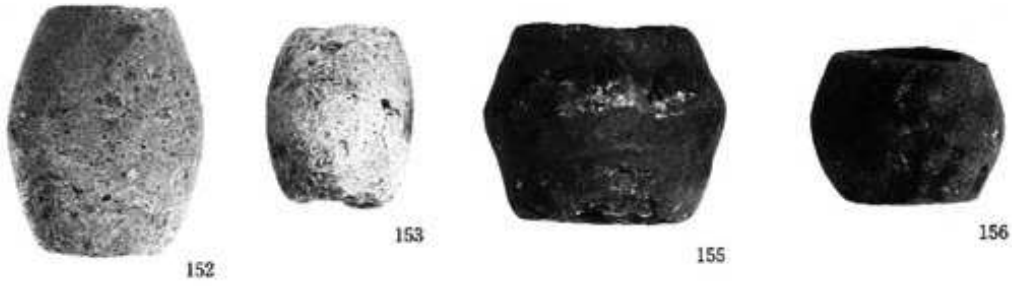
在地系土器(上)　中国製青・白磁(下)



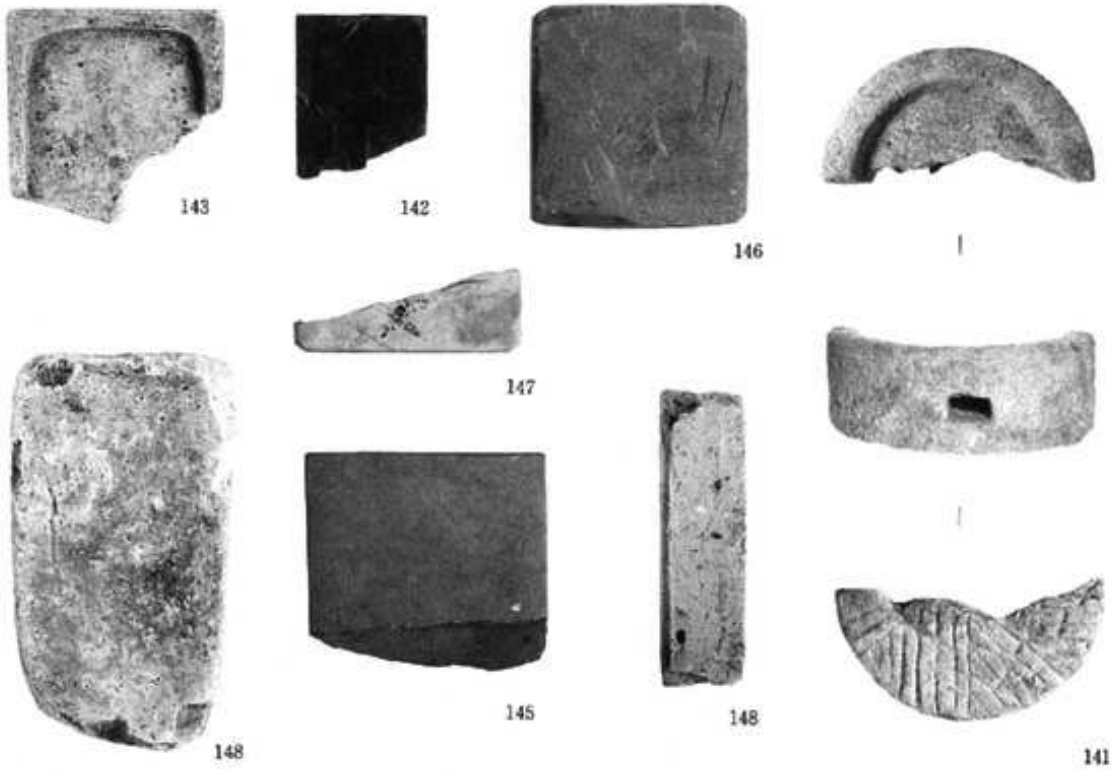
41　39　25　34　40　35　36　30　18

在地系土器

図版十四　遺物　土錘・石製品



土錘



砥石・硯　　石臼

図版十五　遺物　瓦類・土製品・金属製品・古銭

40

42

43

45

46

49

47

39

48

50

44

159

160

161

162

165

164

51

87

52

53

88

89

漆器椀（内面）

51′

87′

52′

53′

88′

89′

同上（外面）

図版十七　遺物　木製品(2)

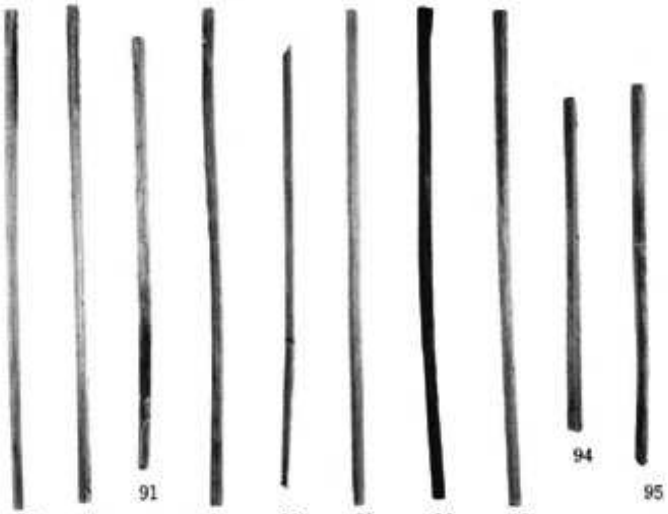
55

54

56

90

68

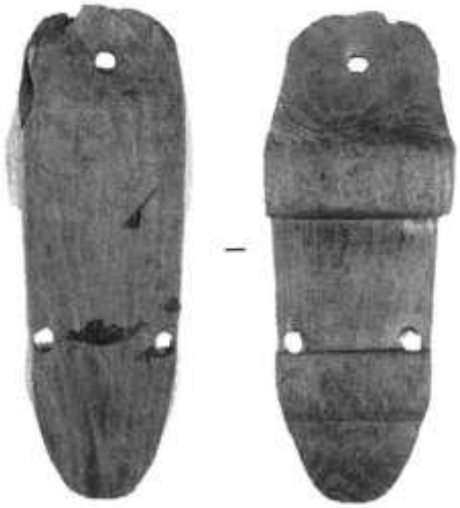

59 60 91 61 63 62 92 93 94 95

83

64

80

図版十八　遺物　木製品(3)

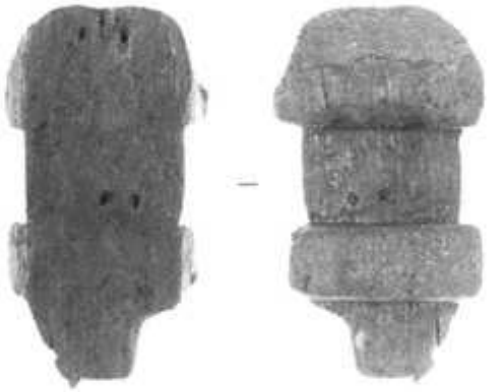


69

74

72

70



73

76

75

下駄

図版十九　遺物　木製品(4)

79

96

78

97

98

99

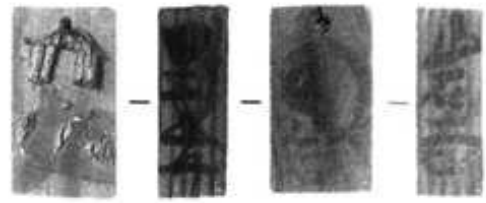
77

57

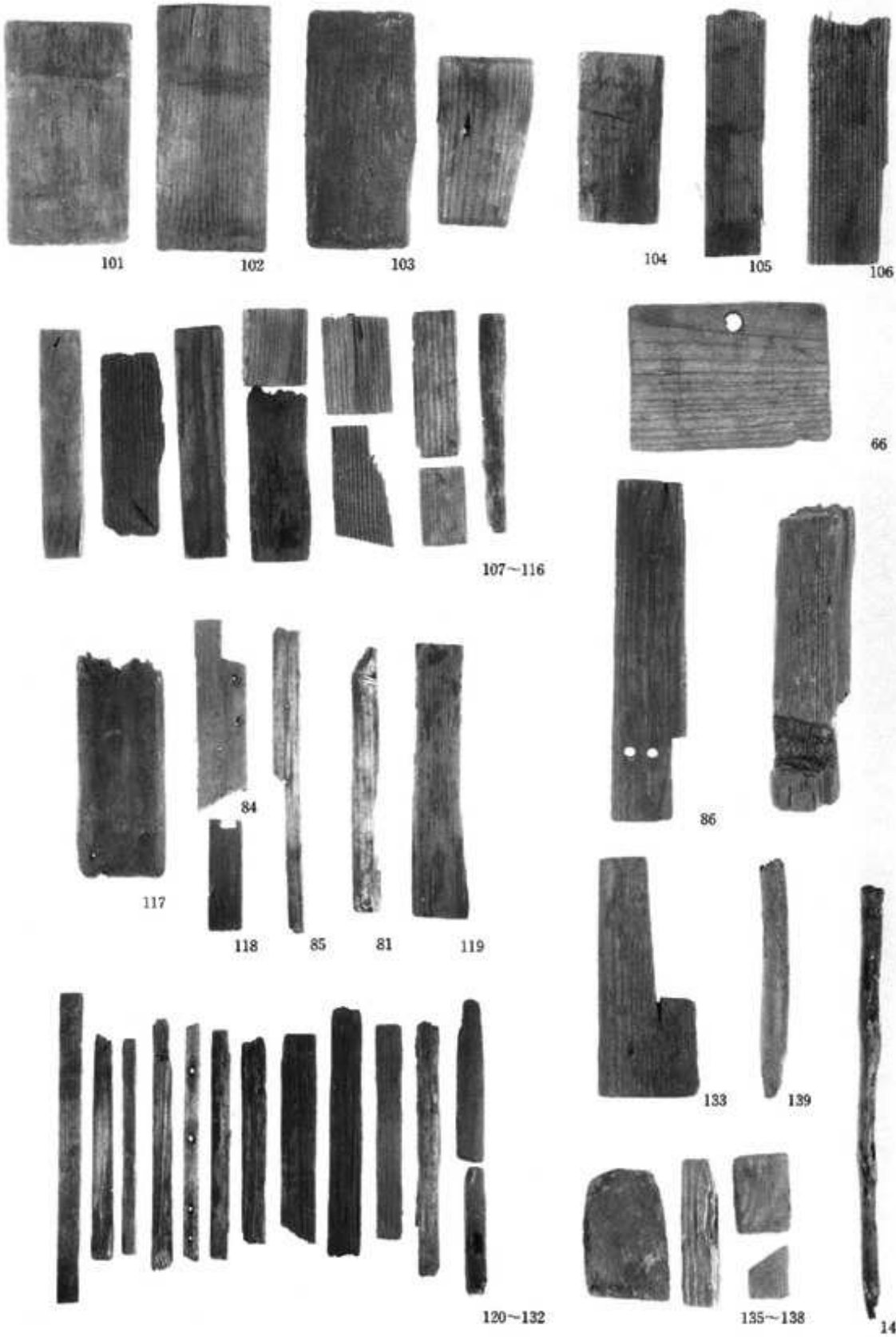
58

100

65


67

図版二十　遺物　木製品(5)


101
102
103
104
105
106
66
107～116
86
84
117
118
85
81
119
133
139
120～132
135～138
140

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第56輯

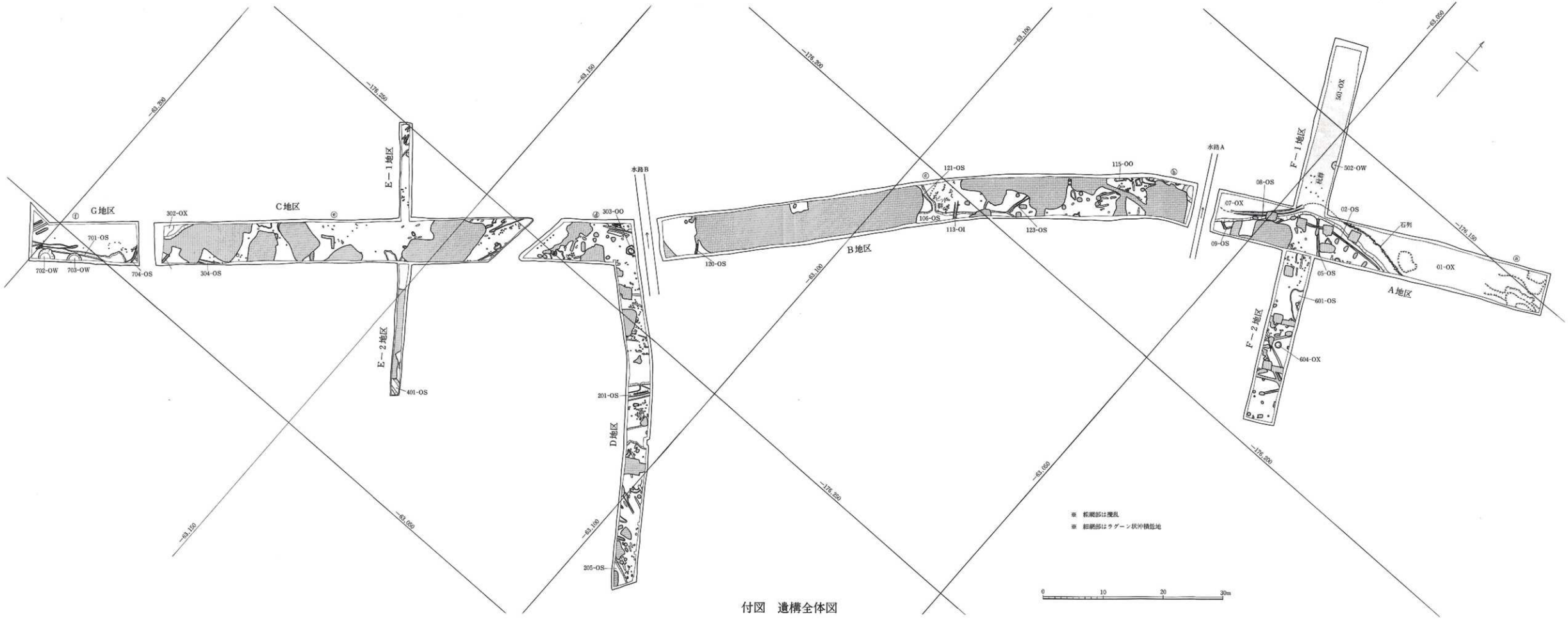
大　場　遺　跡

南海本線分岐線代替地造成事業に伴う発掘調査報告書

1990年3月31日発行

編集・発行　財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
大阪市中央区谷町2丁目2-20番地　大手前ウサミビル

印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所


G地区
C地区
E－1地区
E－2地区
D地区
B地区
A地区
F－1地区
F－2地区
水路B
水路A
701-OS
702-OW
703-OW
704-OS
302-OX
304-OS
401-OS
303-OO
201-OS
205-OS
120-OS
121-OS
106-OS
113-OI
123-OS
115-OO
501-OX
502-OW
08-OS
07-OX
09-OS
02-OS
05-OS
601-OS
604-OX
01-OX
石列
-63,200
-63,150
-63,100
-63,050
-176,200
-176,250
-176,350
-176,150
※ 粗網部は攪乱
※ 細網部はラグーン状沖積低地
0
10
20
30m

付図　遺構全体図